

剛膽な質で、徐に斯う言つた。

「仰せのお言葉、一々御尤と承はりました。併しながら御勳功の莫大な事は、法皇にも常に御感あらせらるゝ儀で御座ります。鹿谷の陰謀を法皇御許容の上と申すことは、何人かの讒言と存せられます。小人の浮言を信じ、且つ下として上に逆らふ事は、人臣たる者の禮に非ず、陽報陰罰孰れも恐るべきことに御座ります。尙ほ能く御分別あつて然るべき事と存じますが、兎も角も仰せの趣、御披露致し置ませう。」と云つて退出した。座にゐた人々は、「大膽不敵の法印。能くも入道殿御立腹の面前にて、些も騒がず、あれ程の事を云つて退けたものぢや。」と法印を褒めぬ者はなかつた。

大臣流罪

法印は急ぎ歸つて、此由を奏上した。法皇にも至極尤の言葉と思召されて、重

ねて仰せ下されることもなかつた。

清盛入道は、十六日、思ひ通りに、白基房卿以下四十三人の官職を剝いで、それ處分することとした。

太宰帥として鎮西へ遷されることになつた基房は、鳥羽近くの故川といふ處で出家をした。三十五歳であつた。禮儀に通じ曇りない鏡の如き人であつたものを、世間から深く惜まれた。

遠流に處せられる人たりとも、途中で出家をする時は、豫定の國へは遣はさぬ定例であつたので、初め日向國に流す豫定が變更され、基房は備前國國府附近の湯迫に留め置かれることゝなつた。

大臣流罪の例は、少なからぬが、攝政關白の流罪は、之れが嚆矢である。

前攝政基實卿の子清盛入道の聳たる二位中將基通卿が、大臣關白の職を襲いだ。二位中將より大中納言をも經ずして一躍大臣關白となつたは、之れも前例のないことであつた。

太政大臣藤原師長卿は、尼張國へ流された。此人は保元にも父悪左府に連坐

して、兄弟四人共土佐國へ流されたが、三人の兄弟は配所で歿し、師長卿だけは九年を経て長寛二年八月召還され、仁安元年十月前中納言より權大納言に進んだのであつた。管絃の道に達し、才學秀れた人であつたので、其後の昇進も速かにして、太政大臣まで人臣の貴を極められたが、何の前世の報いか、又もや流されることゝなられた。

尾張國へ流された後は、琵琶を弾じ、和歌を詠じ、罪なくして配所の月を見る風流を樂んで居た。ある時熱田明神に參詣して、深夜まで琵琶を弾じて朗詠した。村の人々は、呂律は知らねど、社前に集まり、耳を敬て、聞いてゐた。昔胡巴が琴を彈すれば水中の魚も躍り、虞公が歌を唱へば梁上の塵も動いたといふ故事もある。總て物の妙を極むる時は自然に感を催すものである。

段々深更に及んで興ます／＼加はり、秘中の秘曲を弾じてゐると、神明も感應に堪へずして、寶殿大に震動した。

「平家のために流されずば、争で此の奇瑞に會ふ事が出来ようぞ。」と師長卿は、神殿を伏拜んで感涙に咽んだ。

都では、按察大納言資方卿、子息右近衛少將兼讚岐守源資時、參議兼右兵衛督藤原光能、大藏卿兼伊豫守高階康經、藏人左少辨藤原基親等が免官となつた。

中にも按察大納言は、子息資時、孫の雅方と共に、即日都を追放された。

行隆沙汰

前關白基房卿の侍に、江大夫判官遠成と云ふ者があつた。

豫て平家の專横を憤つてゐた爲めに、六波羅より搦捕らるべしと聞いたので、子息江左衛門家成を従へ、南を指して落ちて行つたが、稻荷山で馬を下り、親子相談して、

「東國へ赴き、前左兵衛佐頼朝を手頼らうと思ふが、其も當時流人の御身ゆゑ、御自身の事すら御不自由の折であらう。其外天下に平家の領分ならぬ所が何處にあらう。とても遁れ果せぬものならば、之より取つて返し、六波羅より討手來らば、館に火を懸け、腹掻切つて死ぬるが優ちや。」

河原坂の館に歸り着くと、案の如く、源大夫判官季定攝津判官盛澄が三百餘人

を率ゐて押寄せ、ごつごつと関を作つた。江大夫判官は縁に立出で、大音聲を揚げ、

「如何に方々六波羅へ、此有様を審かに申されい。」

と館に火を懸け、親子とも腹掻切つて、火焰の中に焼死んだ。

斯様に多くの人が悲惨な目を見るに至つたのは、今關白になられた二位中将

と、前の關白の御子三位中将との中納言争ひが、第一の原因だといふことであつ

た。其ならば前關白殿御一人ごんな目にも逢はれて濟みさうなものを、四十三

人まで歴々の人が免官停職になつたのは、淨海入道の心に天魔が入り替つて居

て、萬事に腹を立たせるのであらうと噂された。

去年崇徳天皇に御追號を奉り、悪左府に贈位贈官をなされたが、世の中は仍ほ

静まらなかつた。

爰に前左少辨行隆と云ふ人があつた。此人は故中山大納言顯時卿の長男で、

二條院の御時には、辨官の中でも権力があつたのだが、此の十餘年間は、官職を罷

められて衣食にも窮し、有るかなきかの果敢ない状態であつた。然るに突然清

盛入道より、

「申談すべき事がある。是非御來車あれ。」

と云ふ使者が來た。行隆は、

「十數年間世事にもたづさはらず居るものを、これは唯事ではない。何か讒言

して、吾を滅さうとする者が出來たと思はれる。」

と奥方以下侍女達と共に怖れ歎いてゐた。

西八條よりは頻々として督促の使者が來る。もう猶豫しては居られない。

「兎も角も行つての上の分別ぢや。」

と行隆は借り車に乗つて行つた。意外にも、清盛入道は直に出て來て、心よげ

に面會して、

「其許の父の卿は萬事につけ入道の相談相手で御座つた。其の御子息の其許

ゆゑ、入道も疎かには存じ申さぬ。年來籠居のことも承はらぬでなかつたが、

是まで法皇の御政務中は何とも力が及ばなかつた。併し、今は苦しい、出

仕なされ。官職の儀は追つて推薦致し申さう。今日はまづ御歸りなされ。」

と云つて歸してくれたので、行隆も喜べば、奥方侍女達も死んだ人が生返つた

やうに悦んだ。

其後入道は源大夫判官季貞を使者として、以後支配すべき庄園状など少からず遣はし、さぞ不自由であらうと、先づ馬百匹、金百兩、米も澤山送りつけさせ、出仕の支度に牛車、牛飼召使の者共まで立派に取揃へて贈つたので、行隆は夢ではないかと驚き喜んだ。そして、間もなく、元の左少辨に任せられて出仕することゝなつた。行隆は其時五十一歳、今更若返られた。

法皇御遷幸

越えて十一月廿日(三年承)法皇の御所を六波羅勢が取圍んだ。平治の亂に信賴が、三條殿に仕向けたやうに、火を懸けて人々を焼き殺すのだと云ふ評判があるので、局々の女官達召使の女童まで、取る者も取り敢へず、我先に〳〵と逃げ出した。其處へ前右大將宗盛卿が參内して、御車を寄せ「疾く〳〵」と御幸を促し立てた。

法皇は驚かせられ、

「儲は成親俊寛等のやうに、遠國孤島へ遷し遣られるのであらうぞ。身に何も咎があるとは思はぬ、上があ様の様にあらせられる故、政治に口を入れるばかりのこと、其が悪しとならば以後其も廢めて可い。」

と恐れ多くも仰せられるのであつた。宗盛は恐縮して

「いや左様の事は御座りませぬ。唯暫く世上鎮靜致しまする間、鳥羽の北殿へ御幸を仰ぎ奉れど父禪門が申しますので御座りまする。」

「さらば汝供奉を仕れ。」

と仰せられたが、宗盛は父入道の怒を恐れて供奉は辭した。

「是につけても、兄の重盛には似ぬ愚者哉。先年既に斯様の目に逢はんとせし時は、重盛が身に代へて停め、今日まで心を安んじゐたるに、今は諫むる者がないとして、斯様にするのであらう。此の末何となりゆく事やら。」

と法皇は御涙を流し玉ふ。已むを得ず車に召させられた公卿殿上人で一人の供奉する者もなく、北面武士と、金行と云ふ僧と、孰れも身分の卑い者共が供奉

をして、外に尼が一人其は法皇の御乳人紀伊の二位殿であるが、御車の後から参つたばかりである。

御車は七條を西へ、朱雀を南へと進んだ。

「嗚呼々々法皇の流されさせ玉ふぞや。」

と心なき賤の男、賤の女に至るまで御車を拜して嘆かぬものはなかつた。「去ぬる七日の夜の大地震も斯かる御傷はしき事の前兆であつたか。」と云ひ合つた。

鳥羽殿へ御着きの後法皇の御側には二位殿の外一人もゐなかつた。然るに如何にして紛れ入つたか大膳大夫信成が唯一人参上したので、御前へ召させられ、

「我が命も近い内に取られうと思はれる。行水をしておかうと思ふが如何に。」

此の仰せを承つて、信成は今朝より驚きつゞきで肝魂も身に添はぬ様になつてゐたが、早速狩衣の袖をからげて、玉禪甲斐々々しく、釜に水を汲み入れ柴垣を壊して薪とし、やう／＼行水の御湯をさしあげた。

さて、彼の静憲法印は、西八條の入道邸へ赴きて、

「昨夜法皇鳥羽殿へ御幸あらせられたるに、勿體なくも御前に一人一人も御附き申して居らぬ由餘りの事と存する。何卒静憲一人御許しを被つて御給仕を致したう御座る。」

と云ふと、清盛入道は何と思つたか、

「其許ならば間違ひは仕出かすまい人ぢや。早速参られい。」

と許されたので、静憲法印大に喜び、急ぎ鳥羽殿へ参上し、門の内に進むと、法皇の御讀經の聲が殊に凄う聞えさせられた。法印が、つと参つたのを見て、法皇は

はら／＼と御經の上にお涙をこぼさせられた。

法印は餘りの御傷しさに、袖を顔に押當て、泣く／＼御前へ進んだ。お側に唯一人居た二位殿は、

「やあ法印どの、君には昨日の朝法住寺殿にて供御聞召して後は昨夜も今朝も何一つ食させられず、且つ長き夜もすがら一睡も遊ばされませぬ、御命も御危く見えさせられますぞ。」

實に哀れ極つた次第で法印は悲しさが堪へられないやつと涙をおさへ、
 「何事も限りがあるもので御座ります。平家の世となつて二十餘年されど
 も悪行積つて最早滅亡に近づいて居ります。天照大神正八幡宮も君をば
 争でかお見捨て遊ばしませうや。中にも御歸依深き日吉山王七社は必ず君
 を御守り遊ばしやがて君の御代となり、凶徒は水の泡と消失せ申すで御座り
 ませう。」

と申し上げると法皇もこの言葉に稍御心緩がせられたやうに見受け奉つた。

主上は關白が流され、其他高官の者多く害を受ける事をば痛く御歎きの折柄、
 今又法皇も鳥羽殿へ遷され玉うたと聞召し、御憂慮の餘り御食も進ませられず、
 晝は御病氣と仰せられて寢殿にのみおはしまし、夜に入れば清涼殿にお出まし
 になつて遙かに伊勢太神宮を御拜あらせられる。法皇の御爲の御祈を遊ばさ
 れるのであつた。

城南離宮

主上より潜に法皇へ御親翰を奉つらせられた。

「斯様の淺ましい世に雲の上に居たればとて何の甲斐もなければ、むしろ寛平
 (宇多)花山(天皇)の昔に倣ひ、位を捨て、山林の行者ともならうかと存じます。」
 と認めさせられてあつた。法皇よりは、

「左様な事思召すな。今の如くおはしませばこそ一つの頼みに思ひ存する、山林
 にも潜れさせ玉は、誰を頼みと致さう。唯兎も角も其のまゝに愚老が成り行
 きを御覽あらせられよ。」

と御返翰を差上げさせられた。

主上は法皇の此の御返翰を龍顔に押當て御落涙あらせられた。

御信頼あらせられた公卿は概ね黜けられ、民部入道親範宰相入道成頼の二人
 が残つてゐたけれども、其も浮世をはかなんで世を遁れてしまつた。心ある人
 の留まつて仕ふべき世とも見えなかつた。

越えて二十一日、比叡山の座主覺快法親王が辭任せられたので、前座主明雲大
 僧正が再び座主の地位に就いた。

清盛入道は斯様散々に暴威を振つたが、中宮は娘關白殿も聳なれば、萬事氣遣ひなしと安心したものが、

「爾今政務は主上の御心のまゝ。」

と云つて福原へ下つてしまつた。二三日經つて宗盛參内此由を奏上すると、

主上は、

「汝兎も角も好きやうに相計へ。」

一向御取り合ひもなかつた。

城南の離宮鳥羽殿に御幽居の法皇は、物に觸れ事に付けても、折々の御遊覽處々の御參詣御賀の目出度かりしことども思召しつゞけさせられて、懷舊の御涙の中に冬も半を過ぎた。





卷第四



嚴島御幸

治承四年正月一日、二日、三日とも、鳥羽殿には、入道も許さず、法皇も御遠慮あらせられたので、参賀する者も無い。唯、故少納言入道信西の子、櫻町中納言重教、左京大夫長教の兄弟だけが許しを得て参上した。

廿日は、春宮の御袴着并びに御眞魚始とて目出度いことであつたが、法皇は其の御儀式も、鳥羽殿で噂にお聞きあらせられるのみであつた。

二月廿一日、清盛入道は、別段御恙もあらせられぬ主上に強ひて御位を御年三歳の春宮(安徳)に譲らせ奉つた。

御踐祚後、清盛入道夫婦は、外祖父外祖母とて、准三后の宣旨を蒙り、年官年爵を

賜はり公卿を使ひまはして恰も上皇の如き有様であつた。

高倉上皇は三月上旬安藝の嚴島へ御幸を仰せ出された。天皇御讓位後諸社へ御幸の始めには、八幡賀茂春日などへこそ御幸あらせらるべきが例なるに遙々安藝國への御幸は如何なる故ぞと不審を抱く者が多かつたが中には、

「嚴島は平家の崇敬厚き神社なれば表には平家への御好意御内心には法皇の鳥羽殿へ押籠められ坐すゆゑ清盛入道の心を和らげん爲めの深き御敬慮であらせられう。」

と私語く者もあつた。

比叡山の衆は嚴島御幸と聞いて、

「八幡賀茂春日へ御幸なくば、我山の山王へ御幸あらせらるべきが當然なるに、遙々安藝國への御幸は何故ぞ其儀ならば神輿を振立て、御幸を止め奉れ。」

山門の憤りには手が附けられないので嚴島御幸は暫く御延期になつた。

併し間もなく比叡山の衆は清盛入道が様々に宥めるので静まつた。三月十八日上皇は嚴島御幸の御門出として、八條大宮に在る二位殿(清盛)の邸宅にお

泊りになつた。其夜嚴島の御神事を始められた。關白基通卿は唐車御乗替の馬などを献上した。

明くる十八日は、西八條の入道邸へ渡らせられ、日暮頃前右大將宗盛を召させ

「明日嚴島詣の序に鳥羽殿へ参り、法皇に謁したいと思ふが、其旨豫じめ相國禪門へ知らせずば悪しからうか如何。」

「左様の御氣兼ねには及びますまい。」

「然らば汝今夜鳥羽殿へ左様申上げて参れ。」

宗盛は畏つて鳥羽殿へ参上し、明日上皇御幸の途次、此方へ御訪問あるべき趣を申上げると、法皇は夢かごばかりに喜ばせられた。

翌十九日未明上皇西八條邸を御出發あつて明けきらぬ間に鳥羽殿へ御幸あらせられ、門内へ御入りあれば人稀にして樹間く物さびしげなる御住ひに、先づ哀れを覺えさせられた。春已に暮れんとして、若葉の陰に鶯の聲が聞える。去年の正月六日、法住寺殿に行幸の折は優雅な奏樂の間に諸卿列を爲し、諸衛陣を

引き、嚴肅に行はれた儀式の有様なご思ひ出させられ、今日の御幸の哀れさを夢の様にも思召されるのである。

法皇には早御寢殿の階前までお出ましになつて御待受けあらせられた。上皇は御歳二十歳御母故建春門院に熟く御似ましになつてゐるので、法皇は

先づ故女院の御事を御追懐あつて御涙に咽び玉ふ。兩院の御座は極近く設けられてあつて、御問答は他には聞えない。御前には唯

彼の尼ばかりが侍つて、兩院は良久しく御物語に時を移させられた。日も高うなつたので、上皇は御暇申したまひ、鳥羽の草津より御船に召させら

れた。法皇は上皇の旅泊の行宮波の上船の中の御有様なご覺束なく思召され、上皇は、法皇の離宮の故亭寂寥なる御住居をば御心苦しう御追懐あらせられた。

還御

三月二十六日上皇は嚴島へ御安着入道最愛の内侍が宿所に入らせられ、中二

日御逗留あつて、經會舞樂が行はれる。結願の導師として、公顯僧正高座に登り、鐘打鳴らして、

「九重の都を出でさせ給ひ、八重の汐路を分以て遙々とは是まで參らせ給ひたる

御志の忝さよ。」と高らかに唱ふれば、君臣共に感涙を催される。

上皇は大宮客人を初め末社々々へも成らせられ、大宮より五町ばかり山を廻

つて、瀧の宮へ御參詣の折、公顯僧正は拜殿の柱に、一首の歌を書きつけた。

「雲井より 落ち来る 瀧の白絲に 契を結ぶ ことを嬉しき。」

上皇は、神主佐伯景廣を従五位上に、國司藤原有綱を従四位下に昇叙あり、且つ有綱には院の昇殿をも許され、座主尊永は法眼に爲された。これが爲めには神慮も動き、清盛入道の心も和らぐだらうと思はれた。

廿九日、還幸仰出された、一旦御船を出したけれど、波風烈しく吹起つた、め、引き返して、其日は嚴島の蟻浦と云ふ所に御停船あらせられた。上皇は大明神の

御名残惜しみに歌を詠めど人々に命せられた隆房少將の歌に、

「立歸る

名残もありの

浦なれば

神も恵を懸くるしら波」

其の夜半過ぎて風も凪ぎ海上も穏かになつたので御出發其日は備後國敷名の泊に著かせられた。

此處には應保年間後白河法皇御幸の時國司藤原爲成が造營した御所があつた。清盛入道は御立寄りもあるべきかと修理を施して置いたのであるが上皇は其に御幸がなかつた。四月一日今日は衣着への日だと誰も彼も都の事を語り出す岸の松の枝に咲き懸つてゐた藤の花を御覽ありて、

「あの花を折りに遣はせ。」

と仰せられたので大宮大納言隆季卿は折節御前を梯船に乗つて漕いでゐた左史生中原康定に命じて折らせに遣つた。

康定は藤の花を松の枝に附けながら折つて奉つた。心ある振舞と御賞美あつてさて「此花にて歌仕れ。」と仰せられた。隆季大納言の歌に、

「千年經ん

君が齡に

藤波の

松の枝にも

懸りぬる哉」

二日の日は備前國兒島の泊りに著かせられた。風波の爲め三日の間御逗留五日は好天氣となつて御出發其日は播磨國山田の浦に著かせられ其れより御輿に召して福原へ御安著。翌日は福原の所々御見物あり七日の日は清盛の家の方に御恩賞を行はせられ六日間御滞在あつて清盛入道の養子丹波守清國に正四位下孫越前少將資盛に従四位上を賜ひ同日御出發寺井を経て八日鳥羽の草津へ著かせられると多くの公卿殿上人が御迎に參つてゐた。

還御の際は鳥羽殿へは御立寄りなく直ちに西八條の入道邸へ入らせられた。廿二日は新帝(安徳)の御即位式が行はれた。大極殿は火災の後まだ造營がなかつたので式場の選定に就て公卿の會議があつたが大極殿がない上は紫宸殿が然るべきである。』との九條殿の説に一決して御即位式は紫宸殿で舉行せられ中宮は弘徽殿より仁壽殿へ遷つて高御座へ就かせられた。平家一門の人々は皆參列したが小松殿の公達だけは父の喪中の爲め參列しなかつた。

源氏揃

後白河法皇の第二の皇子に以仁王と申す方があらせられた。其頃三條高倉の御殿に居らせられたので高倉宮と申し上げた。王は御識見もあり筆蹟管絃なども御堪能であつたので太子にも立ち御位にも即かせらるべき御方であるが故建春門院の御猜みに依つて御年三十歳まで高倉の御殿に押籠められ文學風流を弄びておになつたのである。

或夜のこと當時近衛河原にゐた源三位入道頼政が竊かに高倉御殿に伺候して一大事を言上した。

「君は天照大神四十八世の正統神武天皇より七十八代に當らせ給ひ太子にも立ち御位にも即かせ給ふべき御方にて在しながら御年三十まで斯る御有様にましますことを御心憂しとは思召し給はぬか。早々軍を起させ給ひ横暴の平家を亡し鳥羽殿御幽居の法皇の御憤りを休め參らせ君も御位に即かせ給は、此上もなき御孝行かぞ存じまする。若し御思立ち遊ばされて令旨

を下し賜はらば悦び勇んで馳參する源氏も諸國に多かるべく先づ京都には出羽前司光信が子伊賀守光基出羽判官光長出羽藏人光重出羽冠者光能熊野には故六條判官爲義が末子十郎義盛が隠れて居ります。攝津國には多田藏人行綱是は新大納言成親卿謀叛の時返忠致した不届者申すに足りませぬが其弟多田次郎朝實手鳥冠者高頼太田太郎頼基は必ず御召しに應じませう。河内國には武藏權守入道義基子息石河判官代義兼大和國には宇野七郎親治の子太郎有治次郎清治三郎成治四郎義治近江國には山本柏木錦古里の面々美濃尾張には山田次郎重廣河邊太郎重直泉太郎重光浦野四郎重遠安食次郎重頼其子太郎重資木太三郎重長開田判官代重國矢島先生重高其子太郎重行甲斐國には逸見冠者義清其子太郎清光武田太郎信義加々見次郎遠光同小次郎長清一條次郎忠頼板垣三郎兼信逸見兵衛有義武田五郎信光安田三郎義定信濃國には大内太郎維義岡田冠者親義平賀冠者盛義其子四郎義信故帶刀先生義方次男木曾冠者義仲伊豆國には流人前右兵衛佐頼朝常陸國には信太三郎先生義教佐竹冠者正義其子太郎忠義三郎義宗四郎高義五郎義季陸奥

源氏揃

三三

國には故左馬頭義朝が末子、九郎冠者義經、是等の者は皆六孫王の御苗裔、多田満仲の後胤で御座ります。そも武門の家として、源平兩家何れ優劣はなかりし處、今は雲泥の相違と相成り、主従にも劣ることゝなりました。近來政治ますます苛酷に赴き、表面は上に従ふ者と相見えませぬ、内心平家の専横を憎まぬ者は御座りませぬ。此時に當つて君の令旨を賜つたらば、國々の源氏ども夜を日に續いで馳上り、平家を亡すは易々たることに御座ります。左様の場合に立至りますれば、此の入道も年こそ寄つて居りますれど、數多ある若き子どもを引連れて、直ちに御味方致す御座りませう。」

と申上げたのである。以仁王は暫し御思案の體にて、直ちに御承引にはならなかつたが、曾て少納言維長と云ふ人に勝れた人相見が、

「君は天位に即かせ給ふべき御相があらせられます。決して御落膽遊ばしにするな。」

と云つたことなど思合はせられ、

「さては思立てよこの天照大神の御告げであらうか。」

と、遂に御決心を爲される事になつた。先づ新宮の十郎義盛を、令旨の御使として、東國へ下された。

十郎行家は、四月廿八日都を出て、近江國より美濃尾張の源氏どもに觸れて廻り、五月十日には伊豆の北條蛭が小島に著いて、流人前右兵衛佐頼朝に令旨を渡した。後、猶兄の信太三郎義教には、信太の浮島へ行つて渡し、甥の木曾冠者義仲には、木曾山中へ分入つて令旨を渡した。

熊野別當に湛増といふ者がある。此は平家の重恩を被つた者であつたが、如何にして聞出したか、

「新宮の十郎義盛は、高倉宮の令旨を受けて謀叛の企てを致してゐる。那智新宮の者共は、定めて源氏方に附くであらう。都へ仔細を申遣はす前に、矢一筋射懸けて呉れう。」

と、軍勢一千餘騎を率ゐて、新宮の港へ向つた。新宮にては、源氏方の鳥井法眼、高坊法眼、武士には宇井鈴木、水屋龜甲、那智には執行法眼以下、其勢一千五百餘人、湛増の一千餘人を逆へて三日に互つて戦つたが、戦は寄手の大敗北、湛増は命辛

辛本宮へ逃げ歸つた。

馳沙汰

鳥羽殿に御幽居の法皇は、成親俊寛などのやうに、いつ遠國へ遷されることかご御憂慮あらせられたが、清盛から何の沙汰もなく、治承も四年になつて、春も過ぎた。

五月十二日の午頃鳥羽殿に多くの勲が出て走り廻つた。法皇は御占形を遊ばし、近江守仲兼を召させられ、

「これ持つて、安倍泰親に確と考へさせて、判断書を取つて參れ。」

仲兼は仰せの趣畏つて、泰親の家に行つたが、折悪しく不在であつた。白河に居るといふので、尋ねて行つて御詮の趣を傳へると、泰親はやがて判断を書いて渡した。仲兼は鳥羽殿へ取つて返し、門を入らうとするど守衛の武士が許さない。是非なく扉を乗越え、縁の下に這ひ行き、御前の切板より泰親が書付を奉つた。

法皇之を御披見あらせらるゝに、「今日が中の御悦び並びに御歎き」と判

断をしてあつた。法皇は、又如何なる憂目に逢ふことかご御氣掛りである。

同十三日清盛入道は法皇を鳥羽殿より都へ還御なさせ奉り、八條鳥丸美福門院の御所へ入れ奉つた。是は前右大将宗盛が法皇の御事を折節申宥めてゐたので、清盛入道漸く思直したゝめであつた。「今日の中の御悦び」と泰親が申したは此事であつた。さて御歎きとは如何なる事か。

さうするうちに熊野別當湛増飛脚を以て、高倉宮御謀叛の由を都に註進に及んだ。宗盛は狼狽して福原の清盛入道へ知らせ遣つた。

清盛入道は大に怒り、

「其ならば高倉宮を擄取つて、土佐國へ流してしまへ。」

と命じた。源大太判官兼綱、出羽判官光長が、三百餘人を従へて高倉御殿へ馳向つた。

此の兼綱は源三位入道頼政の次男であるが、平家方では以仁王の御旗上と頼政入道との關係をまだ知らなかつたので、兼綱を斯く討手の人数に加へたのであつた。

信連合戦

五月十五日高倉宮は雲間の月を眺めて何心もなく居させられた所へ、頼政入道より急使が来た。宮の御乳母子六條亮大夫宗信が書面を受取り御前へ参つて披見すること。

「君の御謀叛露顯に及び土佐國へ遷し参らするがため、今に御迎への軍勢が寄せます。急いで三井寺へ御立退き遊ばしませ。入道も直に罷出ます。」

と書いてあつた。宮は如何にして三井寺へ立退かんものかと御思案の體であつたが、兵衛尉長谷部信連と云ふ侍が進み出で、

「婦人の装束を遊ばしたら、脱け出でられぬ事は御座りませぬまい。」と申上げた。其れは宜からうと宮は御散らし髪、御衣の上に女衣市女笠をお

冠りなされ宗信は傘を持つて御供に立ち鶴丸といふ僕は物入れた袋を頭に載せて附添ひ、恰も若侍が女を連れて行く様な風で、高倉を北へ進ませられた。途中に大きな溝があつたのを宮は軽々と越えさせられた。道行く人が、

「はしたない溝の越えやうをする女ぢや。」

と怪しんで眺めてゐたので、足早に行き過ぎさせられた。

長谷部信連は一人居残つて、女中達を遣がしてやり見苦しい器物は整理をしようとする際、宮の御秘藏の「小枝」といふ御笛が御居間の御枕頭に取忘れてあるのが目についた。

「此は御大切の御忘物。」

と追著いて差上げると御喜びあつて、

「我死んだらば此笛を棺に入れよ。又汝も供を致せ。」

と仰せられた。信連は、

「御所へ只今御迎への軍勢が参りまするに、一人一人も居らぬといふは世の聞え餘りに口惜しく存じまするのみならず、信連が御所に居りまするは、上下皆存じ居る事なるに、今夜居りませんで、彼も遁げたなご、申されては甚残念の儀に御座りまする。弓箭取る身は假初にも名を惜しみまする。寄手の者と一緒に戦に及びたる上、一方打破つて追つ付け参上仕りませう。」

衣の下に萌黄匂の鎧を着し衛府の太刀を帯して平家の軍勢を待ちかけてゐた。案の如く源大夫判官兼綱出羽判官光長に率ゐられた三百餘人が十五日の夜半頃に押し寄せて来た。兼綱は所存があると思へ遙か門外に控へた光長は馬を門内に乗入れて聲高々と、

「宮の御謀叛發覺致し土佐國へ遷し參らせんが爲めお迎へとして光長參上致して御座る。疾く御出であれ。」

と云ふ。聲に應じて信連は縁側に立ちはたがり、

「吾君には御物詣にて唯今御所には在しませぬ御用の趣は信連承はり置き申さう。」

「當御所にお在なき筈はなし。其儀ならば下部共踏み込んで搜せ。」

信連は立塞がり、

「物知らぬ云ひ様な。馬を御門内に乗入るゝすら奇怪なるに剩へ下部共に搜し奉れとは不埒の一言長兵衛尉長谷部信連茲にあり近寄つて過すな。」云ひも終らず金武といつて大力の聞きある剛の者刀をすらりと抜いて信連目

懸けて縁の上へ飛上つた。敵十四五騎これに續いた。

信連は狩衣の帯紐手早く引切り捨て衛府の太刀(儀太刀)を抜いて切り立てた。敵は大太刀大長刀を以て働くけれども信連の衛府の太刀に切り立てられて颯と庭へ退いた。

信連は勝手不案内の敵勢を此處の廊下に追懸けては切り彼處の詰りに追詰めては斬つた。

「宣旨の御使に向つて何事ぢや。」

と逃げながら云つた者もあつた。

「何が宣旨ぢや。」

と信連は太刀が曲めば押し延ばし踏み延ばして矢庭に十四五六人を切伏せた。太刀の鋒先が三寸ばかり打ち折れた。早やこれまで腹切らんと腰を搜したが短刀は落ちてゐた。腹も切られず據なく大手を擴げ高倉の小門より跳出でんとする所に大長刀持つた武者が一人詰め寄つて来た。信連は踏み落さんと長刀の上へ飛びかゝつたが踏損じて股

をグサと貫かれ、倒るゝ所を多勢疊みかゝつて生捕にした。
寄手の者どもは御所の内に亂入して、隅々までも捜したが、宮はお在にならなかつたので、信連ばかり縛りあげて六波羅へ引立てた。

宗盛は信連を庭前に引据ゑさせ、

「汝は宣旨の御使と名乗る者を、宣旨とは何ぞと云うて切つたるな。其上檢非違使の下部共を多く殺傷したるものなれば、糺問の上河原に引出して首を刎ねるぞ」

大剛の信連は嘲笑つて、

「當節は竊盜強盜山賊海賊など申す奴原が、宣旨の御使公達の御入りなど、申して討入る由聞き及んで居りました。今夜夜半に鐘うたる者共が三百餘も打入りましたる故何者ぞと尋ねましたに、宣旨の御使と申しましたから、是こそ例の盜賊等と考へ、宣旨とは何かと申して切りました。若し信連十分な鐘を著し、切味の好い刀一口持つて居たらば、何の一騎も安穩に歸さうや。其上宮の御在所は一向に存し申さぬ。縦ひ存じ居ればとて一度申すまいと思ひ

定めた以上、如何に拷問に及ばれるとも申すべき筈は御座らぬ。」

此れぎり口を噤んで、如何に拷問に及んでも一言も物は云はなかつた。平家の侍どもは驚いて、

「あッばれ剛の者一騎當千の兵とはこれであらう。」

と口々に云つてゐると、或る一人がいふ、

「信連が強いことは今に始らぬこと、先年藏人に仕中護衛の武士多勢にて扱ひ兼ねた六人強盜を、信連一人して四人を切伏せ二人は生捕つたと申すことぢや。兵衛尉には其の時爲つたのぢや。斯かる豪傑をむざむざ殺すは惜しいもので御座る。」

と云ふ者もあつて互に惜み合つてゐたが、清盛入道は何と思つたか、

「左様なれば殺してはならぬ。」
命を助けて、伯耆の日野へ流すことにした。其後信連は源氏の世となつてから、鎌倉へ下り、梶原平三景時に事の仔細を申立つると、鎌倉殿より神妙ぢやとお褒めを受け、能登國に領地をも賜はつたといふことである。

高倉宮園城寺入御

女装して高倉御所を立退かせられた以仁王は、終夜慣れぬ山路を辿らせられて、曉方に三井寺へ御安著。

「衆徒を憑りに参つたぞ。」

と仰せられると、寺も多し中に我寺を憑みとして御出になつたのを名譽とし、大衆大に喜んで、法輪院に御座所を設けて迎入れ奉つた。

競

高倉宮御謀叛を企てられ、事露顯に及んで三井寺へ落ちさせられたと云ふことを聞き知つた都の人々の、十六日の騒ぎは一通りでなかつた。

元來源三位入道頼政が、高倉宮に勧め奉つて、謀叛を起すに至つたには、平家の次男宗盛の専横を憤つたのが主因であつた。

其頃三位入道の嫡子伊豆守仲綱が「木の下」と呼ぶ鹿毛の名馬を有つてゐた。平素其の馬を宗盛は欲しがつてゐた。遂に使者を立て、

「名馬「木の下」を所望致す。」

と伊豆守へ申入れた。伊豆守は、

「彼の馬は餘り乗り疲らし申したに依つて、暫く勞はらんが爲め田舎へ遣はして御座る。」

と返事をして置いた。其儘暫くは何の沙汰もなかつたが、平家の侍どもが「彼の馬は一昨日も見受け申した。」昨日も見受け申した。「今日も庭乗りを致し居りました。」など、口々に云ふのを聞いて宗盛は、

「さては手放すのが惜くて、我を欺いたな。憎むべき振舞ぢや。さらば飽くまでも所望する。」

と使者書面に七八度にも及んだので、三位入道之れを聞き、

「縦ひ黄金にて丸めたる馬であらうとも、其程人の所望するものを惜むは宜しくない。速かに六波羅へ遣はすやうに致せ。」

と云はれて伊豆守も是非なく、一首の歌を書き添へて宗盛に贈つた。

「戀しくば

來ても見よがし

身に添ふる

か〇げをばいか

放ちやるべき。

宗盛は禮狀も出さず、

「馬は誠い馬ぢや。去乍ら餘り惜んだのが面憎い彼の名乗を鐵燒に致せ。」

と仲綱といふ烙印印をして廐に繋がせ名馬拜見を望む人でもあると、

「仲綱めに鞍を置け。引出せ。乗れ。打て。」

と伊豆守へ面當てに、散々馬を苦しめて溜飲を下げてゐた。

伊豆守はそれを聞いて、

「大切な馬を權柄づくに奪られた上世間の物笑ひになるとは残念千萬。」

と大に憤つた。父の三位入道も堪へかね、

「何を爲得るものかと侮つて、平家の奴等が左様な無法なことを致すのぢや。其ならば生きて何になるものぞ機會を窺て一泡吐かせでおくべきか。」

と平家討伐の決心をしたのであるが、名義が無く私しにも兵は起されぬので、遂に高倉宮を勧め奉ることになつたのであつた。それに附けても人々は小

松内大臣のことが思出されるのである。

ある日、内大臣参内の序に、中宮の御殿へ伺候されたとき、何處から出たものか突然、八尺ばかりの蛇が内大臣の傍へ来て這ひ回つた。内大臣はそれを見て、女官達が騒ぎ、中宮も驚かせられるであらうと思つて、そつと左の手で蛇の尾を押へ、右の手で頭を掴んで、直衣の袖の中に引入れ、平氣な顔で座を立つて、

「六位々々。」

と呼んだ。其頃藏人であつた伊豆守仲綱は「はッ仲綱で御座ります」と出て参つた。重盛は何にも言はず、其の蛇を渡した仲綱も黙つて其を受取つて引下つた。それから仲綱は庭へ持つて行つて、小舎人を召んで「此れ賜らう」と言ふと、小舎人は吃驚して頭を抱えて逃出した。そこで仲綱は我が家來の渡邊競に渡して蛇を捨てさせた。

翌朝内大臣は、好い馬を選んで、鞍を置かせて、

「此馬は至極乗心地よき馬ぢや、夕方お退廳から、美人の許に急がるゝとき乗りたまへ。」

と洒落たことを言つて伊豆守に贈り物とした。

仲綱は大臣の贈物だから難有頂戴して、さて其の返事に、

「昨日のことは丁度還城樂の様で御座りました」

と言つた。還城樂といふ舞に蛇を弄ぶことがあるから、さう想ひ合せたのである。

兄の内大臣は斯様に優しい心掛の人であつたが弟の宗盛は人の愛馬を奪ひ取つて遂に天下の大事を譲すに至つた實につまらない事である。

源三位入道頼政は、十六日の夕方邸宅に火を懸け焼き捨て、嫡子伊豆守仲綱、次男源大夫判官兼綱六條藏人仲家其子仲光以下、甲冑の武士三百餘人を率ゐて近江の國三井寺へ赴いた。

其事が六波羅へ聞えた、早速頼政の邸へ人を出して見ると瀧口(宮城)の武士渡邊競が唯一人残つてゐた。

競は渡邊黨の剛者で而も王城一の美男である、平生宗盛の邸の側を通つて出勤をする姿を見て、宗盛は我が家來に欲しがつてゐたのであつた。

六波羅勢は残つてゐる競を引立て、行つた。

宗盛は競に向つて、

「汝は親重代の主人たる三位入道の供は致さで、何故に留まつたか。」

「萬一の場合には真先に命を捧げうと、日頃は覺悟致して居りましたが、如何なる次第か、今夜何等の知らせも下されませぬに依つて、留まりましたして御座りまする。」

「汝は兼て此方見知の者でもある、將來の立身を考へて當家に奉公致す氣はないか、それとも又朝敵頼政に従はうと思ふか。」

「いえ、縦ひ重代の主とは云ひながら朝敵となる人に何の従ひませう。此方に御奉公致したう御座りまする。」

「然らば奉公致せ。頼政に劣つた待遇は致さぬぞ。」

と宗盛は奥へ入つた。併し競が事が氣になつたと見えて、競は居るか／＼と、度々尋ねられるので、居ります／＼と答へてゐた。

日が暮れかける頃宗盛は奥から出て來た。競は畏つて、

「三位入道は三井寺へ參り、定めて夜討なんどの準備を致し居られうかと存じ

まする。御馬一頭貸し給はらば、馳せ迎へて、選討ちに致してくれませう。」
 勇ましい此の言葉が宗盛の氣に入つた。早速「南鐐」と呼ぶ白草毛の秘藏の馬に
 好い鞍を置いて競に與へた。競は一先づ我が宿所へ立歸り、
 「早く日が暮れてしまへ三井寺へ馳せ行いて、入道殿の御馬前にて眞先かけて
 打死ぢや。」

とそれ／＼妻子を片つけて、夜に入ると館に火を掛け、家に傳はる緋威の鎧を
 著け、白星の冑を冠り、二十四本の矢を負ひ、滋藤の弓を持つて、「南鐐」に打跨り、
 乗換の馬に童僕を乗せ、外に一人楯を持つた家來を連れて、三井寺指して馳せ去
 つた。

競が館の火の手を見て、六波羅では騒ぎ出した。

宗盛は氣を苛ち、

「競は居るか。」

「居りませぬ。」

「うゝ、彼奴に欺罔られたな。追懸けて討取れ。」

怒にまかせて宗盛は嚴命したが、競は大力の剛の者、矢繼早やの手利きである
 から、二十四本の矢で、二十四人は必定射殺されると、誰一人追懸ける者もゐな
 かつた。

三井寺では渡邊黨が寄合つて、

「競は是非如何にもして召連れられたいもので御座つた。」

など、云つてると競の心を能く知つてゐる三位入道は、

「むざ／＼生捕られもすまい。見よ、今直に參るであらうぞ。」

と云ひも終らぬ内に、競が乗込んだ。

「伊豆守殿へ『木の下』が代りに、六波羅の『南鐐』を取つて參りました。」

と、ヒラリと飛下りて「南鐐」を差出すと、伊豆守は手を打つて喜んで直に鬘

と尾を切り棄て、焼印をしてその夜六波羅へ追ひ返した。厩の番人は驚いて、

「南鐐が歸つて參りました。」

と叫ぶ聲に、宗盛飛出して見ると、

「昔は南鐐今は平宗盛入道。」

と烙印がしてあつた。宗盛はこれを見て、
 「憎い競め斬つて捨つれば宜かつたものを、手後れして欺罔れたのが残念ぢや。
 今度三井寺を攻めるとき、如何にもして生捕にして參れ、彼奴の頸鋸びきに
 て呉れう。」
 と躍上り、地だんだ踏んで怒つても、「南鐐」の尾も鬚も生えはせず、烙印
 の跡が消えも爲ない。

山門牒狀

三井寺では、鐘を鳴らし法螺貝吹いて、一山の大衆を呼び集めて會議が開かれ
 た。

「そも、近來の世情を見るに、佛法は衰へ王威も窘つてしまつた、今にして清
 盛入道が暴惡を懲さずして、復何日を俟たうぞ、此度高倉宮我寺に入らせられ
 たのは神明の冥助である。叡山南都の大衆にも牒狀を送つたならば、同意致
 さぬことは有るまい。」

と評議一決して、五月十八日先づ比叡山へ牒狀を送つた、其の意味は、

殊に合力を致されて當寺の破滅を救はれたき事

清盛が佛法を破滅し國法を亂すは寔に愁嘆極りなき所である。今月十五
 日の夜、高倉宮は平家の壓迫を脱れうと當寺を憑つて入らせられた。然るに
 院宣と號して、宮を渡し奉れと嚴重の談判が來た、當寺に於て宮を彼等の毒手
 に委するに忍ひずして、之を拒んだところ、遂に軍勢を派遣して攻伐せられよ
 うといふことになつた、當寺の滅亡眼前に迫つて一山の僧徒悲憤の涙を絞つ
 てゐる。そも、貴寺と當寺とは、寺門別々に分立してゐるが、元來同じ天台
 の教を修めるもので、譬へば鳥の兩翼、車の兩輪の如きもの、一方が缺けるは他
 の方も愁ふべきところである。願はくば佛法王法の爲め年來の遺恨を忘れ
 て、當寺の破滅を救ふべく合力あらんことを望む。

南都牒狀

比叡山の大衆は此の狀を受取つて、

南都牒狀

「何ぢや、是は園城寺は元來我が延暦寺の末寺でありながら對等の地位で、もある様に、鳥の兩翼車の兩輪に譬へるとは無禮千萬。」

と返書も出さなかつた。
一方では清盛入道より天台座主明雲大僧正に對して、衆徒を鎮められたしとの懇望があつたので大僧正が急ぎ登山して大衆を抑へたのである。

清盛入道は其時比叡山へ、近江米二萬石北國の織延絹三千匹を贈つた。大僧正は直ちに谷々嶺々の宿坊へ分配させたが、俄かのことであつたため、一人にて多くの分配に預つた者もあれば、一つも分配に預らなかつた者もあつた。

何者の仕業か、斯うした張紙をしたものがあつた。

「山法師 織延衣 薄くして

恥をばえこそ 隠さやりけれ。」

「織延を 一きれも得ぬ 我等さへ

薄恥をか 數に入る哉。」

次に奈良の興福寺に對して、園城寺より合力援助を乞ふ牒狀を送つた、其の意

味は比叡山に送つたのと略同じであつたが、其の返事は極めて慷慨淋漓たるものであつた。

南都の返牒

奈良の興福寺は比叡山延暦寺に比して由緒も劣らず勢力も劣らぬ大きな寺である。春日神社は藤原家の氏神で、興福寺は藤原家の氏寺であつたから、藤原家が權勢を占めたたげ、其だけ興福寺の勢力も張つてゐたのである。平家の勃興、清盛の擅權に依つて、藤原家が甚しく壓迫せられることになつた、其が直接に興福寺の勢力に影響するので、僧徒は無論平家に對して好意を有して居なかつた、だから、今園城寺の牒狀に對して興福寺の僧徒は深い同情を有つて、大衆悉く園城寺の要求を容れることに一致した。其の返牒は随分猛烈な文句で綴られ、中には斯ういふことが言つてある。

「そも、清盛入道は平家の糟糠で、武家の塵芥である。祖父正盛は五位の家に仕へて諸國の國司の下働をした、父忠盛は昇殿を許されたとき、公卿達から

同席を愧ぢられたほどの卑しい家柄である。然るに清盛は僅か一戦の功に依つて過分の拔擢に預り、遂に人臣の貴さを極め、子息は大臣大将と爲り、女子は中宮と爲り、一門の輩皆榮達を恣にしてゐる。天下の國土を我物とし、百官の進退も自由にし、一毫の氣に入らぬことがあれば、王候と雖も之を捕へ、片言も耳に逆へば公卿と雖も之を搦める。我身の安全を慮るためには萬乗の君も平家の機嫌を取らせられ、歴世の名家も腰を屈めねばならぬのである。現に去年の十一月には太上天皇を押し籠め、攝政關白をも流罪に處した惡逆實に古今に絶してゐる。吾等も義憤を發して討伐の兵を起さんと欲し時機を看てゐたのであつた。今幸ひに高倉宮が神明の助けを受けて貴寺に入らせられたるところ、平家の奴輩暴威を振つて貴寺に向はんとする趣就いては諸寺に通牒し軍兵を募つて花々しく御對抗あらんとの御計畫なる由御知らせに與つて痛快に堪へない當寺に於ても早速軍備を整へて御加勢に罷り出る心得である。」

大衆揃

三井寺では高倉宮御入の後、大小の關所を構へて防戦の準備を爲し、又大衆の會議を開いた。

「山門の大衆は同意をせず、南都の大衆はまだ到着しない、併し其を待つて延引してゐては宜しくない。今夜六波羅へ押寄せ、夜討を爲さう。其ならば、老少二手に分つて、老僧どもは如意が嶺より裏手へ向ひ、足輕どもを先立て、白川の民家に火を懸け、焼立てたらば、六波羅の武士どもが、そりや大變と馳せ向ふに違ひない、其時岩坂櫻本邊にて暫し防ぎ戦つてゐれば可い。其の慮に乗じ、伊豆守を大将として、若大衆惡僧ども、正面から六波羅に押寄せ、風上に火を懸けて焼立てたらば、太政入道の首討取れぬことはあるまい。」

ど方略が定まりかけた時に、兼て平家方に心を寄する一如坊阿闍梨眞海は、弟子、同宿の坊主數十人を率ゐてゐたが、會議の席に進み出で、

「斯様申せば平家方と思はれんかなれども、決して左様の儀では御座らぬ。近

來源氏は運傾き、平家世を取つて既に二十餘年天下に靡かぬ草木もこれなき有様で御座れば、我等の小勢を以て容易く平家を攻め滅すことは出来さうにない。能く謀を運らし、十分の兵力を蓄へて後の事に致しては如何。尚種々の利害を述べて、時を移らせるため故らに評議を長びかせたのである。すると、白柄の長刀を杖についで乗圓坊阿闍梨慶秀が評議の席へ躍り出で、「昔天武天皇未だ春宮の御時僅十七騎にて芳野を出で給ひ、美濃尾張の軍勢を以て、遂に大友皇子を亡し位に即かせ給うた。窮鳥懐に入れば獵夫だも之を殺さぬ。當寺を憑ませ給ふ高倉宮を見殺しになるものか、他人は知らず、此の慶秀が門徒に於ては、今夜直に六波羅に押寄せて打死致す。」

と教團いた。圓滿院大輔源覺氣を苛つて、「長詮議無用々々。夜更けぬ内に進め、急げ。」

と大聲に叫んだので、老少二手の軍勢いよゝ進發と決定し、先づ裏手に向ふ老僧ごもの大將としては、源三位入道賴政之に當り、乘圓坊阿闍梨慶秀、律成坊阿闍梨日胤、帥法印禪智、禪智が弟子義實、禪永を先登として都合一千人、手々に松明

を持つて如意が嶺へと向つた。

正面の大將としては伊豆守仲綱之に當り、源太夫判官兼綱、六條藏人仲家、其子仲光大衆には圓滿院大輔源覺、律成坊伊賀公、法輪院鬼佐渡成喜院虎土佐、此二人は力強く、弓矢にも太刀にも長じて如何なる鬼にも敵するといふ所謂一騎當千の勇士である。其外宇治の平等院からは因幡堅者荒太夫、角六郎房、島阿闍梨、筒井法師、郷阿闍梨、悪少納言。北院の者では金光院の六天狗、式部大輔、能登、加賀佐渡備後。松井、肥後澄南院、筑後賀屋、筑前大矢俊長、五智院、但馬慶秀が手下六十人の内、加賀光乘、刑部俊秀、一來法師、筒井淨妙、明秀、小藏尊月、尊永、慈慶、樂住、鐵拳、玄永。武士には渡邊省播、摩次郎、薩摩兵衛長七、唱、競瀧口、與右馬允、續源太、清進を先登として都合一千五百餘人、三井寺を打立つたが、防禦の爲めに設けてあつた堀に橋を渡すやら、逆茂木を取除けなごする間に時刻が移つて、早や鶏の聲が聞え出した。

伊豆守は首を傾け、

「此處で鶏が啼いては六波羅へ達するは明日の白晝になる、如何致さう。」

と云ふと圓満院大輔源覺進み出で、

「昔孟嘗君が秦の國を遁るゝとき函谷關に差掛つた。關所の習ひとして鶏の啼かぬ限りは關の戸を開く事が出来ない。鶏の啼くのを待つてゐては追手が恐ろしい、然るに孟嘗君が三千の食客の中に鶏の鳴き聲に巧みなる者があつて、小高い所に走上つて鳴く真似をする。關の鶏も之れに和して皆啼いた。關守は鶏の空音に因され、關の戸を開いて通したと云ふことが御座る。今の鶏も或は敵の謀でがな御座らう。さあ管はず進め。」

彼は是するうち、もうほのゝと東の空が白みかゝつた。伊豆守はこれを見て、「夜討ならばと思つたが、晝軍では到底勝利覺束ないさあ引返せ。」と松坂より取つて返し裏手の一隊は如意が嶺より引返した。若大衆の面々

は、

「これは一如房が長評議の故ぢや。彼奴を切れ。」

とて、どや／＼と押寄せて、一如房を切り、防ぐ弟子や同宿の者共まで残らず傷を付けた。

一如房は手負ひながら、這々の態で六波羅へ逃げ行き、事の仔細を訴へ出たが、六波羅には既に數萬騎の軍兵が集つてゐて更に騒ぐ氣色もなかつた。

高倉宮は山門の大衆は變心して南都の大衆は未だ參らず、三井寺の大衆だけでは到底六波羅勢に敵すること覺束なしと思召されて、廿三日の曉方に三井寺を出で、奈良へ落ちさせられることになつた。

此宮は蟬折小枝といふ漢竹の名笛二本を秘藏せられ、中にも蟬折は昔鳥羽院の御時支那の皇帝へ砂金を贈らせられたことがあつて、其の御返禮として、生きた蟬のやうに節の附いた笛竹を一節贈つて來たのを鳥羽院は三井寺の覺宗僧正に仰せて、壇上にて七日祈禱をさせた上彫らしめられた御笛である。或時高松中納言實平卿が參内して、此の御笛を吹いた時、吹罷して普通の笛の様に、膝より下に置かれたところが、笛が咎めたものと見え、蟬のところが折れて了つた。それから蟬折と呼ばれることになつた。宮は笛が特にお上手であらせられたので、此の名笛を賜はつてゐたのである。今を限りと思召されたので、宮は此笛を金堂の彌勒菩薩に納めておかれた。

宮は老僧達には皆暇を賜つたが、若干の若大衆は御供をして、三位入道の一門渡邊黨と合せて總勢一千五百餘人あつた。乘圓房阿闍利慶秀は鳩杖に絶つて、宮の御前に参り、兩眼からはら／＼と涙を流し、

「何處までも御供仕らうと存じましたが、年既に八旬を越えて、歩行不自由に御座りますれば、弟子刑部房俊秀に御供を致させます。此者は去んぬる平治の合戦の時、故左馬頭義朝が手に付き、六條河原に於て討死致しました相模國の住人、山内の須藤刑部丞俊通が子で御座りますが、聊の縁あつて愚僧が育てあげました者で、心の底まで能く／＼存じて居ります。どうか何處までも御供仰付け下されませ。」
と申上げると、「如何なる好に斯くまで申して呉れるか。」と宮も暫し御涙に咽ばせられた。

橋合戦

高倉宮は、三井寺と宇治、僅かの間で六度までも御落馬なされた。これは先夜

からお眠りが足りなかつたからであつたといふ。奈良まで直行は御無理だといふので、宇治の平等院に入れ奉り、御休息を願つた。宇治橋は中程を三間許り橋板を引剥して渡れぬ様にして置いた。

六波羅では、

「すは宮は南都へ落ちさせられるぞ。追懸けて討ち奉れ。」

と大將軍には左兵衛督知盛、頭中將重衡、薩摩守忠度、侍大將には上總守忠清、其子、上總太郎判官忠綱、飛彈守景家、其子飛彈太郎判官景高、高橋判官長綱、河内判官秀國、武藏三郎左衛門有國、越中次郎兵衛盛績、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清を始めとして都合二萬八千餘騎、木幡山を打越えて、宇治の橋側へ押寄せた。敵は平等院にありと見て、関の聲を三度擧げた。宮方でも之に應じて同じく三度ごつと聲を擧げた。

既に橋を渡りかけた寄手の先陣は、橋板が引き弛してあるのに氣付いて、「やア、橋板が引いてあるぞ、怪我するな、橋が引いてある。」と怒鳴るけれども、後陣には其が聞えない、吾先にとドシ／＼と押し掛けるの

で先陣の二百騎計は押落されて水に溺れた。

宇治橋を中に挟んで、宮方と平家方との間に矢戦が始まった。宮方の大矢俊長、五智院但馬、渡邊省、授續源太が射懸ける矢は楯を射徹し、鎧を貫いて、平家方の膽を冷させる。

源三位入道頼政は、今日を最後と長絹の鎧直垂の上に科皮威の鎧を著し、わざと兜を冠らず、嫡子伊豆守仲綱は赤地錦の直垂に黒絲威の鎧を著し、弓を強く引くために、之も兜は著なかつた。

矢繼早に射伏せ射倒し、散々平家方を惱ましてゐた五智院但馬は弓をカラリと投げ捨て、大長刀の鞘を脱して唯一人雨と射懸ける矢の中を橋の上へと進み行く。

平家方ではこれを見て、

「あれ射取れ〜。」

と差詰め引詰め散々に射る。但馬は騒がず、八方に眼を配つて高い矢は屈んで潜り、低い矢は跳り越え、正面に来る矢は長刀で切つて落す、其の鮮かな手際に

は敵も味方も感歎して、此より「矢切の但馬」と呼ばれることになつた。

尚、僧兵の中に筒井淨妙明秀は、黒草威の鎧著て、五枚冑の緒を止め、二十四指した黒幌の矢を負ひ、塗籠籐の弓に白柄の大長刀を提げ、これも唯一人、橋の上へ進んで行つて、

「遠からん者は音にも聞け、近からん人は目にも見よ。我こそは三井寺に隠れなき筒井淨妙明秀とて一人當千の兵ぢや。いざ見參。」

と二十四本の矢を散々に射て、見るまに十二人を射殺し、十一人に手を負はせ、唯だ一筋残つた籐を弓と一緒に投げ捨て、跳になつてする／＼と橋桁を走り行き、それ討てと向ふ敵五人を長刀で薙ぎ倒し、六人目の敵と渡り合ふ時、ぼきりと中程より長刀が打折れた。

此度は、太刀を引抜いた。群がる敵を物ともせず、蜘蛛手かく繩十文字、蜻蛉返り、水車秘術を盡して切り捲り、瞬く間に八人を切り伏せ、九人目の兜の鉢を勢ひ込んで切り付けたれば、太刀は目貫の元より折れて河の中へ飛んで落ちた。頼む所は腰刀、其を引抜いで又死物狂ひに戦うた。

茲に又乗圓房阿闍梨慶秀に事へてゐた。一來法師と云ふ大力剛の者は暫し淨妙房が後の方で戦つてゐたが橋桁は狭くて側を通つて進めないで、淨妙房が兜の鍔に手を置いて、

「淨妙房御免。」

と言つて肩を跳り越え、平家の軍に切り込み散々に戦つて打死した。

淨妙房は戦ひ疲れ、平等院の門前に取つて返し、芝生の上で鎧を脱いで、矢の目を數へて見ると六十三あつて、裏に徹つたのが五所、それでも深傷は一ヶ所もなかつたので所々に灸を据ゑ、衣を着て、弓の折を杖に突き、念佛を唱へながら、奈良の方へ下つて行つた。

其の後、三井寺の僧徒頼政入道の一族波邊黨の面々は、淨妙房を手本として我先にと橋桁を押渡り、火の出るばかり戦つて、分捕して歸る者もあれば、深傷を負うて、腹掻切つて川へ飛入る者もある。

此時、平家方の侍大將上總守忠清は、大將軍知盛の前に進み、

「あれ御覽あれ。橋の上の戦ひの烈しさを。今は川を渡すべきなれど此五月

雨の水嵩では馬も人も危う御座ります。此上は淀一口へ向ひませうか。

それとも河内路へ廻りませうか。」

と申してゐると、下野國の住人足利又太郎忠清十七歳の若者が進出で、

「眼前の敵を討たずしてをめぐ、宮を南都へ入れ奉らば、吉野、戸津川の軍勢ど

も馳集つて、彌御大事と相成りませう。武藏と上野の境に利根川と申す大河

が御座る。秩父、足利合戦の砌、上野國の住人新田入道足利勢を援けんため、杉

の渡より寄せんと致せしに、用意の船を秩父勢より打壞され、「唯今此處を渡

さずば長き弓矢の瑕ともならん、水に溺れて死するともいざ渡せ」と馬筏を

作つて渡したと聞き申す。此河の深さ、早さ、利根河に如何程の劣り勝りが御

座らうや。續け殿原！」

と言ひもあへず、馬に鞭當て、さつと宇治川へ乗入れると、大胡、大室、深須、山上、那

波太郎、佐貫、廣綱、四郎、太夫、小野、寺禪師、太郎、邊屋、子四郎、郎等には、宇夫、方次郎、切生

六郎、田中、宗太を始めとして、三百餘騎、續いて馬を乗入れた。

足利又太郎これを見て、聲高く、

「弱き馬は下流に立て強き馬を上流に致せ。馬の足の及ぶ程は手綱を呉れて歩かせよ。撥まばかい線つて泳がせよ。列を放れんとする者は、弓の強に取附かせよ。手に手を取組み肩を並べ、馬の頭沈まば引揚げ、鞍壺に能く乗つて強う鎧を踏め、河中には弓引くな。常に鎧を傾けて、馬には弱う、水には強う、渡せや〜」

と誠めつゝ、三百餘騎一騎も流されず、對岸へ颯と乗り揚げた。

宮御最後

其日足利又太郎忠綱は、赤革威の鎧に高角打つた兜を冠り、黄金作りの太刀を佩き、二十四指した切斑の矢を負ひ、滋藤の弓を手挟み、連錢革毛の馬に金覆輪の鞍置いて乗つてゐた。岸に上るや、鎧踏張り立上つて、

「昔し朝敵將門を亡して名を後代に揚げたる、俵藤太秀郷十代の後、胤下野國の住人足利太郎俊綱が子、又太郎忠綱生年十七歳。三位入道殿の御方に我と思はん人々は、いざ寄せ給へ。見參々々。」

と名乗りかけ、平等院の門内へ攻入つた。

これを見た大將軍知盛、大音聲に、

「渡せや、渡せ！」

と下知すれば、二萬八千餘人、ドツと打入ると、宇治川の急流も人馬に塞がれて、水は川上に押し上げられた。馬の下手に取附いて渡る雑兵共は、膝より上を濡さぬ者も多かつたが、伊賀伊勢の軍勢六百餘騎は、馬筏を押し破られ、馬諸共に押し流された。萌黄緋威赤威など色々の鎧武者が、浮きつ沈みつ流るゝ様は、瀧田川の秋の暮峯の嵐に散る紅葉の様であつた。

其中に緋威の鎧著た武者三人、網代に流れかゝつて、流れもあへず洶られてゐた。伊豆守はそれを見て、

「伊勢武者は、皆緋威の鎧著て

宇治の網代に懸りぬる哉。」

平家の大軍は川を渡つて、平等院に押寄せた。到底對抗の見込が無いので、一方の口より脱れ出で、高倉宮は奈良に向はせられた。頼政の一族、渡邊黨三井寺の

大衆は踏み留まつて防戦した。

蝗のやうに飛び來る矢に源三位入道は左の膝口を射貫かれた。七十を越してゐる上に此の重傷を負うたのだからもう是迄心靜かに自害せんと平等院の門内へ退却した。

其處へ又敵が追ひすがつた。

次男源太夫判官兼綱は之を見て引返して其の敵を防いでゐたが上總太郎判官の爲めに内兜を強か射られて疼む處へ上總守が童僕次郎丸と云ふ大力の剛の者が無手と組んで兼綱と共に馬からドウと落ちた。兼綱は名ある大力次郎丸を取つて押へて首を掻き立上らうとする處をバラ／＼と敵の十四五騎寄つて簇つて遂に兼綱を討取つた。

伊豆守仲綱も散々戦ふ内に數ヶ所の重傷を負ひ平等院の釣殿で自害した。首を敵に取らせまいと下河邊藤三郎清親が打落して縁の下へ投入れた。

六條藏人仲家其子又太郎仲光は親子共に勇戦したが同じ場所で討死した。此時頼政入道は渡邊長七唱を召し。

「聲を討て！」

と命じたが争で主の生首が討たれよう涙ながら

「せめて御自害の後ならば。」

と云ふ。入道は打領き西に向ひ合掌して高らかに念佛を唱へた後

「埋木の

花さくことも

なかりしに

實のなる果ぞ

悲しかりける。」

この辭世の和歌を詠んで太刀の鋒を腹に突立て俯して貫くと長七唱は首を討ち石に括つて宇治川の底に沈めた。

平家の侍どもは如何にもして競瀧口を生捕に爲ようとおせつたが競は其を知つて居て思ふ存分戦ふだけ戦つた末潔く腹を切つた。

圓満院大輔源覺は今宮にも遠く落ち延びさせられたと見て右と左で太刀大長刀を打振りながら敵の中を駆け抜け宇治川へ飛んで入り川の底を潜つて對岸に著き振向いて大聲を揚げ

「やあ／＼平家の人達此處まで御座れ。よう。」

と云ひ捨て近江の三井寺へ歸つて行つた。

平家方の飛彈守景家は、宮は必定南都へ落ちさせられると見込をつけ、四五百騎を率ゐて追懸けた。案の如く宮は三十騎ばかりで、光明山の鳥居の前を落ちさせ給ふところで追つ著いた。

そこで、景家の兵は雨のやうに矢を射掛けた。誰の矢か一筋、宮の左の御側腹に中つたので、ドツと馬より落ちさせられるところを、駈寄つて遂に御頸を取つた。

御供してゐた鬼佐渡荒土佐荒大夫刑部俊秀等は、宮御最後のうへは何の爲めに命を惜しまうと、散々に戦つて皆討死した。

其中に六條亮大夫宗信と云ふ、高倉宮の御乳母の子は、新野が池に飛込んで藻草を頭に覆つて、慄へながら隠れてゐた。

暫く経つと、勝誇つた平家の軍勢は、笑ひごよめきながら引上ぐる様子、そつと藻草の中から覗いて見ると、白衣を着けた首のない死骸を、戸板に載せて昇いて行く、其が宮様であつた。死だら一緒に棺に納めよと豫て仰せのあつた小枝の御

笛が御腰に差したまゝであつた。

宗信は、驅寄つて、縋り付きたくも思つたが、恐しさにそれも叶はず、平家方が全部引上げた後、池から這ひ上り、濡れた着物を絞つて、泣く泣く都へ歸つたのを、恩義を知らぬ臆病者と憎まぬ者はなかつた。

南都の大衆七千餘人、宮の御迎へとして、甲冑に身を固め、先陣は木津に進み、後陣は興福寺の南大門をまだ出たれぬ内木津から僅か五十町許隔たつた光明山の鳥居前で、宮は追手に殺れさせられたと聞いて、大衆は今更致し様もなく涙をおさへて宇治行を停めた。

若宮御出家

平家方の人々は、高倉宮の御首を初め、三位入道の一族、渡邊黨三井寺の大衆都合五百餘人の首を切つて、太刀長刀の鋒に貫き高々と指上げながら、勇み勇んで、日暮頭六波羅へ凱旋した。

頼政入道の首だけは、長七唱が宇治川の底深く沈めたので、遂に見當らなかつ

たが、息子達の首は此處彼處より皆捜し出された。

宮の御首は、平家方で誰一人見知つたものがあつたので、其實否が分らない。先年御療治の爲めに高倉御所へ参上した、典藥頭定成を召して確かめようとしたけれども、定成は病氣と稱して來なかつた。

やがて、一人の婦人が尋ね出された。其は宮の御寵愛を蒙つたもので、御子を幾人か産けてゐるのだから、宮の御首を見間違ふものでない、一目見るよりわつと泣いて袖を顔に押當てた。これで宮の御首といふことが確かめられた。

高倉宮は御子が多かつた。八條女院障子内親王の御所にゐた伊豫守盛教が娘三位局の腹にも、七歳の若宮と五歳の姫宮とが有らせられた。

清盛入道は弟池中納言頼盛を、八條女院の御所へ遣はして、若宮姫宮とも御引渡しを請求したが、「お二人共お傳役などがお連れ申したものと見えて、此の御所にはお在にならぬ。」といふ御返事であつた。頼盛歸つて復命に及ぶと、清盛入道は、

「女院の御所ならで何處へおいでになるものか、其ならば武士ども參つて、お捜

し申せ。」

と命令を下した。頼盛は、女院の御乳母宰相をいふ婦人を妻とし、平生繁々通つてゐたのであるが、此のお使に參つた以來二人の交情も疎くなつた。女院の

御所に隠れてお在になつた若宮は、女院に、

「斯様に大事となりましては、到底通れることは出来ませぬ。何卒平家方へお渡しなされて下さりませ。」

と仰せられた。女院はこの御言葉を聞召されて、

「人の七つ八つは、まだ何事も聞き分けぬものなるに、御身ゆゑに、斯様の大事と成つたるを、氣毒に思召して、よく左様に仰せられます。此の六七年の御養育も無益になつて、今日の憂目を見るにや。」

女院は御涙に咽ばせられた。

間もなく頼盛が又若宮の事を掛合に來た。女院も今は致しかたなく、遂にお渡しになつた。

母の三位局は今を限りの御別れゆる、御名殘惜しさは申迄もないが、是非ない

こと、泣く／＼お衣裳を著せ申し、御髪を撫でつゝ、頼盛へ渡したが、唯もう夢の様に思はれた。

女院御初め、局の女達女童に至るまで、餘りの御傷しさに涙を流さぬものはなかつた。

頼盛は若宮を車に乗せ六波羅へ送つた。前右大將宗盛は、此の若宮を見て、父入道に向ひ、

「若宮を一目見申して、餘りに御傷しう存じます。別に差支へも生じますまい。どうか御命を枉げて宗盛に賜されませ。」

入道は何と考へてか、
「然らば御出家をお爲せ申せ。」

宗盛の乞ひを容れた。
宗盛は此旨を、八條女院へ此旨を届けたが、御返事には速に御出家お爲せ申せといふとであつた。

そこで若宮は仁和寺の御室の御弟子とならせられた。後に東寺の一の長者、

安井宮の大僧正道尊と申したのは、此宮の事である。

奈良にも高倉宮の御子が一方居られた。此の宮は、御傳讀岐守重秀が御出家をさせて、北國へ御供申上げてゐたが、後木曾義仲上洛の時主と仰がんだため、還俗をさせ、都へ御供申上げたので、木曾宮とも、又還俗の宮とも、又野依の宮とも、申上げた。野依宮と言つたのは、嵯峨の邊の野依といふ處にお在になつたことがあるからである。

清盛入道は、高倉宮の御謀叛に對して、調伏の法を承はつた高僧達に、それ／＼賞與を行ひ、又宗盛の子息侍從清宗を三位に叙した。今年十二歳である。父宗盛は此の齡では、やつと兵衛佐であつたのに、十二歳ぐらゐで此の高官に昇るのは、攝政關白の子の外には前例のないことである。

行賞の辭令には、源以仁(高倉)竝に三位入道頼政父子追討の賞としてあつた。太上法皇の皇子を矢先に掛けるさへ恐れ多い事だのに、其上勝手に姓を付けて臣下の取扱をするとは、亂暴至極である。

鶴

源三位入道頼政は攝津守頼光五代の後胤たる參河守頼綱の孫兵庫頭仲正の子にして、保元の合戦には官軍として戦の功を建てたが、格別の賞も受けず、平治の亂には親類をも捨て、忠戦したが、恩賞は是れ亦輕かつた。年久しく宮城守護の任にあつても昇殿は許されなかつた。それで老年に及び、

「人知れず

大内山の

山守は

木隠れてのみ

月を見るかな。」

この述懐の和歌を詠んだことが、お上に聞えて漸く昇殿を許された。正四位下で永くゐた末、又詠んだ歌が、

「上るべき

たよりなき身は

木の下に、

しゝを拾ひて

世を渡るかな。」

又聞えて、やがて三位に陞され間もなく出家して源三位入道頼政と呼ばれた。頼政一生に、高名も多かつた中に、殊に勝れた高名といふのは、仁平の頃、近衛天

皇御在位の時、主上夜々物に劫えさせ給ふ事があつた。高僧に仰付けられて、大法秘法を修めさせられても何等の驗もなかつた。

夜半過ぎて丑刻になると、いつも東三條の森の方から、一叢の黒雲が渦巻いて來て、御殿の上に棚びく、此時主上は必ず物におそはれ給ふのであつた。

そのため公卿會議が開かれた。堀河天皇寛治年間に主上夜々劫えさせられた事があつた。其時の將軍義家朝臣、紫宸殿の縁に宿直をして、御櫓の刻限に弓弦を三度鳴らし、高聲にて「前陸奥守源義家」と名乗を揚げたが、其聲が凜として、聞く人身の毛彌墜つて、主上の御櫓も輕くならせられたといふ。先例に依つて、此度も武士に警固を申付けるが宜しからうと、源平兩家の中から選出されたのは、當時兵庫頭の頼政であつた。頼政は、

「朝廷に武士を置かれるは、叛逆の者を退け、違勅の輩を亡さんが爲めぢや、目にも見えぬ妖怪變化を仕留めよと仰せらるゝは聞き及ばぬことぢや。」

と云ひながらも、勅命なれば、拒むことはならず、參内した。平生憑み切つてゐる郎等、遠江國の住人、猪早太に、鷲の羽の矢を負はせ、自分は二重の狩衣に、山鳥の

尾で矧いだ鋒矢二筋、滋藤の弓を携へて紫宸殿の縁側に伺候した。

鋒矢を二筋用意に及んだのは、當時左少辨であつた雅頼卿が、「變化の者を仕留むる者は頼政である」と推薦したため、一の矢で若し變化の物を射損じたらば、二の矢では雅頼卿の頸骨を射貫いてやらうといふ覺悟であつた。

其晩御惱の刻限になると、例の如く東三條の森の方から、黒雲が一叢飛んで来て、御殿の上に棚引いた。頼政きつと見上げると、雲の中に怪しい物の姿があつた。鋒矢一筋弓に番へて、

「南無八幡大菩薩！」と一心に祈念しつゝ、弓引絞つて、ひやうと放つた。手答へあつて、ドウと地に落ちた。得たりや應と頼政が矢叫をすれば、猪早太駆寄つて取つて押へ、柄も拳も徹れどばかり、續様に九刀刺し徹した。

宮中の人々は、矢聲を聞いて、手々に松明を點し、宙を飛んで来て見ると、頭は猿體は狸、尾は蛇、手足は虎の如く、其の鳴く聲は鶴に似た恐ろしい怪物が、朱に染んで横たはつてゐた。

主上の御惱は忽ち御平癒あらせられた。御感の餘り、獅子王といふ御劍を賜

はつた。宇治左大臣之を頼政に授けんと、殿前の階段を半ば下るとき、恰好二聲三聲、郭公の啼く聲が聞えたので、左大臣早速、

「郭公 名をも雲井に あぐるかな」

と詠みかけると、頼政は右の膝をつき、左の袖を播げて、四月十日の傾く月を、傍目に見ながら、

「弓はり月の いるにまかせて。」

下の句を斯う附けて、御劍を戴いて引退るを、天晴の人と皆が感嘆した。武藝にのみ限らず、歌道にも亦勝れてゐたのである。

頼政が射た變化の物は、空船に入れて流されたといふことであつた。

其後又應保の頃、二條天皇の御代に、鶴といふ怪鳥が、宮城の上の空で鳴いて、屢宸襟を惱ました事がある。

先例に依つて又頼政を召させられた。

五月二十幾日のまだ宵の雨空に、鶴が唯一聲啼いて、後は聞えなかつた。闇の夜で姿は見えず、更に見當の附けやうもなかつた。

頼政は先づ大鎧の矢を取つて番ひ、鶴の聲した御殿の空へと射上げた。鶴は鎧の音に驚いて、ひら／＼と飛び上つた。御座んなれと頼政は、直に小鎧を番へて射放せば誤たず、鶴はバタリと落ちて來た。

宮中の人々は聲々に喝采した。主上よりは頼政に御衣を賜はつた。大炊御門右大臣公能卿が御取次をして御衣を頼政に授くる時、「昔の養由は雲の外、雁を射今の頼政は、雨の中の鶴を射た」と賞讃しつゝ、

『五月間』

名をあらはせる

今宵哉』

と詠みかけると、頼政は如左附けた

『たそがれ時も 過ぎぬと思ふに。』

さて、恩賜の御衣を肩に懸けて退出した。

其後伊豆國を賜つたので、頼政は子息仲綱を國司となし、自分は三位に進み、丹波の五箇庄若狭の東宮河を領し、安樂に過される身であつたのに、無謀の軍を起して、皇子も自分の一家も滅亡するに至つたのは嘆はしい。

三井寺炎上

『平素は比叡の僧徒こそ我儘な強訴を起して朝廷に抗するに、此度は奈良と三井寺とが一致して、或は宮を匿ひ、或は御迎へに出る等正に朝敵の所爲である。

興福寺も三井寺と共に攻め滅して了へ。』といふことになつて、平家の六波羅では軍議を決し、先づ三井寺より攻めようと、大將軍には左兵衛督知盛、副將軍には薩摩守忠度都合一萬餘の兵を率ゐて園城寺即ち三井寺へ攻寄せた。

寺方ではこれを聞いて、大衆一千餘人悉く甲冑に身を堅めて、防戦の準備をして待受けた。

戦は朝の六時頃より始まり、一日戦ひつゞけて、夜に入つた。僧軍の戦死は三百餘人に及んだ。

夜軍になつてから、平家方は闇に紛れて寺内に攻入り、八方に火を放つた。本覺院、成喜院、花園院、大寶寺、清龍院、普賢堂、教待和尚の本坊、竝に本尊堂、八間、四面の大講堂、鐘樓、經堂、灌頂堂、護法善神社、壇新熊野御寶殿、都て堂舎塔廟六百三十七宇、

大津の民家一千八百五十三戸、一切經七千餘卷、佛像二千餘體、忽ちにして灰となつてしまつた。

寺の長吏圓慶法親王は、天王寺の別當をも免せられ、高僧十三人は檢非違使に預けられ、堂衆筒井淨妙明秀等三十餘人は流罪に處せられた。





卷第五



都遷

治承四年六月三日に主上福原(攝津)へ行幸あらせらるべきことに定まつた。清盛の別荘地たる福原へ都遷しがあらうとは先頃から風説には上つて居たが、まさか昨今の内に事實に現はれようとは思はなかつたと俄かに京中の上も下も驚き騒ぐ。

然るに其の三日といふ豫定が、また一日繰上げられて二日となつた。朝の六時には既に行幸の御輿が寄せられた。

今年三歳にならせ玉ふ主上は何の御心もなく御輿に召させられた。御同輿は母后であらせらるべきに、たゞ御乳母帥亮だけがお附き申したのであつた。

中宮(建禮)法皇(後白河)上皇(高倉)も共に御幸あらせられるので、太政大臣以下卿相雲客平家一門の人々皆供奉する。

三日、福原へ御安着あらせられ、清盛の弟池の中納言頼盛の山莊を皇居と定めさせられた。其の賞として翌日頼盛は正二位に叙せられた。

清盛入道は、やう／＼思ひ直して、曩に法皇を鳥羽の北殿より都へお還し申したが、高倉宮御謀叛の事を憤つて、此度は福原へお遷し申して、唯一方にだけ口を開けた三間の板園の中に押し籠め、守護の武士として原田大夫種直を唯一人附けておいた。容易に人の出入も出来ないもので、下々では籠の御所と云つてゐた。

法皇は、「もう世の中の政治などに關係しようとは思はぬ、唯山々寺々に修行でもして心の儘に過したいものぢや」と仰せられた。御哀なことである。

斯程に平家の悪行は極度に達した。安元以來、大臣公卿を流したり殺したり、我聲を關白としたり、法皇を鳥羽の離宮に押し籠めたり、第二の皇子高倉宮を殺したりして、遂には遷都までも行つたのである。

尤も遷都は神武天皇以來度々行はせられたことである。

桓武天皇も奈良から一度山城國長岡に都を遷し給ひ、延暦十三年十一月二十一日更に又京都(當時宇)に遷し給ひ、平安城と名づけられて、其より今迄(安徳)帝王は三十二代星霜は三百八十餘歳を経て居るのである。

平安遷都の時八尺の土人形を作り、鐵の鎧兜を著せ、鐵の弓矢を持たせ、都の守護神として東山の峰に、西向きに立て、埋めておいた。此塚は天下に大事の生ずる前に必ず鳴動する。將軍塚と云つて今に残つてゐる。

其後嵯峨天皇の御時、一度都を遷さうとせられたが、大臣公卿を初め、諸國の人民までが反對したので、御沙汰止めになつた。

一天萬乘の君でさへ濫に遷し得させられぬ都をば、清盛入道は人臣の身を以て亂暴にも遷して了つたのである。

舊都となつた平安城はまことに佳いところであつた。王城鎮護の比叡山は一方に聳え、靈驗殊勝た寺々が薨を並べ、五畿七道に交通の便もよく、百姓萬民安堵をしてゐたのに、今は辻々を掘切つて車の往來も困難になり、住む人も次第に減つて、軒を争つた家も日毎に荒れ行くのである。

或ひは家を解き崩して筏に組み賀茂川桂川に流し舟に積んだ資財雜具と共に、福原の新都へ運び下すなど哀れなことであつた。

何者の仕業であつたか。舊御所の柱に二首の歌を書附けてあつた。

『百年を 四回までも 過ぎ來にし』

愛宕の里の 荒れや 果てなんし』

『咲きいづる はなの都を ふり捨て、』

風ふく原の末ぞ あやふし』

新都

六月九日、新都經營に着手されて、徳大寺左大將實定、土御門宰相中將通親、前左少辨行隆など、多くの官人を従へて、和田の松原、西の野に、舊都の制に倣つて九條の地割をして見たが、一條より五條までは大路を設ける面積があるけれども、六條以下の場所はなかつた。

公卿の會議が開かれて、福原は狭くて到底帝都の規模でないから、播磨の印南

野、攝津の昆陽野に爲ようかなど、色々の議論が出たが、何れも決定しなかつた。舊都は廢れて新都は出來ず、百官も庶民も浮雲の思ひをしてゐる。特に、福原に元から住んでゐた者は土地を取り上げられて悲しみ、遷つて來た者は建築の費用に窮して、誰も困るものばかりであつた。土御門宰相中將通親が、

『異國には三條の大路を開いて、十二の洞門を立てたといふことがある。五條

までも開かれる土地に、都の建てられぬことは無い、兎も角、内裏を造營したが

好からう。』

と申されたので、五條大納言國綱に、周防國の收入を以て内裏造營すべきやう命令を下された。國綱は大福長者であるから、内裏の造營を引受けても苦しくはあるまいが、詰りは國の費、民の煩とならずに済むまい。指當つて今上天皇即位の禮たる大嘗會など行はせらるべきに、其を擱き靜かにもない世の中に、遷都や新皇居造營などは、不釣合の事だと心ある者は眉を顰めた。

月見

新皇居建築の議が決して八月十日には上棟十一月十三日に御遷幸と豫定せられた。舊都は日増しに荒れるけれども新都は追ひ々々繁昌して來た。斯くて夏も暮れ秋も早や半となつた。

福原の新都に移つた人々は名所の月を觀ようと須磨明石の浦々繪島の磯なごに徘徊ひ或は白浦吹上和歌の浦住吉難波高砂尾上の月の曙を眺めて歸る人もあつたが舊都に残つた人々は伏見廣澤などの昔ながらの月を賞してゐた。

徳大寺實定は舊都の月の戀しさに八月十日過ぎ福原より上つて行つた。

舊都は何事も變り果て稀に残つてゐる家も草など生ひ茂つて蟲の聲のみ高く野原の様になつてゐる。昔のまゝに在になるは近邊河原の大宮(近衛天)だけであつた。實定は夜に入つて大宮の御所に伺候し供の者をして表御門を叩かせると内より女の聲で、

「どなたで御座りまする。」

「福原より大將殿の御上りで御座る。」

「左様なれば表御門は鑰がさして御座りまするゆゑ東の小門からお入り下さ、

れませ。」

其晩大宮は御徒然のあまり昔の事など思ひ出させられて南面の戸を開けさせ琵琶を弾じて御在になつてゐたところに御意ひがけなく實定が參つたので御膝の琵琶を擱かせられ、

「お、夢か現か是へ〜。」

と殊の外御喜びあらせられ何かと御物語りあらせられた。

大宮の御所には、「待宵の小侍従」と云ふ女官がゐた。「待宵」と呼ばれた縁由は、ある時御前で、

「待宵と歸る朝と何れか哀れ深かいものと思ふぞ。」

とお尋ねがあつたのに、

「待宵の つけ行く鐘の 聲聞けば 歸る朝の 鳥は ものかは。」

即座に此の名歌を詠んで御答へ申したからである。

實定は「待宵」の小侍従とも昔今の事など夜更けるまで物語して後、

「舊き都を来て見れば

浅茅が原ぞ荒れにける

月の光は隈なくて

秋風のみぞ身には沁む。」

と荒れ行く舊都の有様を今様に詠んで、繰り返し「三度吟ひ澄した。之を聞いて、大宮をはじめ、御所中の女達まで悉く感傷の涙に袖を濡された。

夜も明けかけたので、實定はお暇を申し、福原への歸途に供の藏人を招き、

「小侍従が餘りに名残惜しげに見えたゆゑ、汝歸つて何とか言つて參れ。」

藏人は馳せ歸つて小侍従に逢ひ、大將殿が申せと仰せられましたと前置して、

「物かはと 君が云ひけん 鳥の音の

今朝しもなごか 悲しかるらん。」

と、自作の歌を吟じた。小侍従は取りあへず、返歌を詠んだ。

「待たばこそ ふけゆく鐘も つらからめ

歸る朝の 鳥の音ぞうき。」

藏人は走せ歸つて、此の贈答の次第を話すと、實定は大に感心して、

「さてこそ汝を遣はしたのぢや。」

それからこの藏人は、「物かはの藏人」と呼ばれることになつた。

怪物

平家が都を福原へ遷してからといふものは、人々の夢見も悪く、不斷胸騒ぎばかりして、色々不思議な事が多かつた。

或夜のこと、清盛入道が寝てゐられた所に、室一杯に餘るほどの大きな顔が現はれて、清盛を覗き込んだ。入道は少しも騒がず、はつたと睨みつけて居られると、やがて消え失せた。

清盛入道の邸は、新築の事とて、格別樹木などもなかつたのに、或夜、大木の倒れる音がして、ごつと二三千人ばかりの笑聲が空中に聞えた。多分天狗などの所爲であらうといふので、晝は五十人、夜は百人の番人を置き、墓目の番と名附けて、墓目を射させると、其矢が天狗の居る方へ射たと思はれる時は、何の音も爲ぬが、居ない方へ射たと思はれる時は、咄と笑聲が起る。

或日の朝であつた。清盛入道が寢室を出て、戸を押開けて、庭を眺めると、數限

りもない獨體が充ち満つて組んだり、ほぐれたり、下になり上になり、轉び合ひ轉び退きして、ガク／＼と音がする。

「誰ぞ、參れ！」

清盛は人を呼ばれるけれども、誰も來ない。其のうちに多くの獨體は一つに固まりあつて、高さ十四五丈の山程の大きな獨體となり、大きな頭に、生きた人の様な大眼玉が千も萬も出來て、其の眼が悉く清盛入道を睨み据ゑ、暫くは瞬もしなかつたが、入道が平氣で、ちつと睨みつめて立つてゐると、やがて跡方もなく消えて了ふ。

清盛入道に一頭の愛馬があつた。此馬は相摸國の住人大庭三郎景親が、東國一の名馬とて献上したものであつた。額が少し白かつたので「望月」と名附けられてゐた。ところが、此馬の尾に、鼠が一夜の中に巢をくつて子を産んだ。

これは尋常事ではないと、神祇官に占はせると、重大事件の前兆であると占つた。昔天智天皇の御時にも、寮の御馬の尾に、鼠が一夜の中に巢をつくつて子を産んだ事がある。其後外國の兇賊が侵入して來たと日本書紀に見えてゐる。

入道は氣味を悪がつて「望月」を陰陽頭安倍泰親に給れてしまつた。

又源中納言雅頼の召使ふ侍が、不思議千萬な夢を見た。その夢は、宮中の神祇官の役所とも思はれる所に、服装正しい貴人が數多寄合つて御評議の體であつた。末座の女性方は、平家の最負でもなされる様であつたが、其席から追ひ立てられ、遙かの上座に氣高さうな方が御在になつたのが、

「此まで平家が預かつてゐた節刀を取返して、伊豆國の流人前右兵衛佐頼朝に授けよう。」

と仰せられると、其傍の方が、

「其後は吾子孫にも御授けを願ひたい」

其侍は夢の中で、一人の翁に、貴人の名を尋ねると、

「末座の貴女は、嚴島の大天神節刀を頼朝に賜ふと仰せられたは、八幡大菩薩吾孫にも授け給へと仰せられたは、春日大明神斯く云ふ吾は武内明神。」

と答へられた。侍は覺めてから此夢を人に吹聴した。

清盛入道は、これを聞て雅頼の處へ使を以て、「其方に夢見の侍が居るさうだ、

此方に遣して貰ひたい、夢の次第を詳しう尋ねたい」と言つてやつた。侍は、ごんな事になるかと怖れたと見えて逐電して了つた。

其後雅頼は入道邸へ参上して、全く左様の事は無いと申し陳じたので、いつか夢の噂も消えてしまつた。

併し不思議なことに、清盛入道が安藝守の時代、嚴島参拜の折に靈夢を蒙つて、嚴島大明神より賜はつた銀の蛭巻したる小長刀は、常に枕邊近く立て、置いたのに、或夜俄かに紛失して了つた。平家は是迄朝廷の固めとして天下を守護してゐたが、今は勅命にも背いたから、節刀として賜はつたものも取返されることになつたのか、心細いことである。

大庭早馬

此の小長刀紛失の事を聞き傳へて、驚かぬ者はなかつたが、中にも高野にゐた宰相入道成頼は、

「あゝ、最早平家の榮華も盡きたか。嚴島大明神が、平家を助け給ふには謂があ

る、八幡大菩薩が、節刀を頼朝に賜ふと仰せられるも有理である。併し春日大明神が、其後は吾孫に授け給へとの御言は、稍腑に落ちぬ。平家が亡び、源氏の世も盡きた後、大織冠の御末、藤原家の君達が、天下の將軍と爲られるのであらうか。」

なご、判断をして居つた。

治承四年九月二日、相摸國の住人大庭三郎景親は、福原へ早馬を以て、

「去んぬる八月十七日の夜、伊豆國の流人、前右兵衛佐頼朝、舅北條四郎時政と共に謀して、伊豆國の目代、和泉判官兼高の屋敷の館を襲うて之を討取り、其後土肥土屋岡崎等の三百餘騎と石橋山に立籠りましたに依つて、景親時を移さず御味方の者を催し、一千餘騎を率ゐて押寄せ、散々に打破つて御座る。頼朝は之れが爲めに七八騎に打ちなされ、土肥の杉山に逃げ籠りましたるに、三浦大介の一族三百餘騎應援を仕り、味方の畠山勢五百騎と由井小坪の浦にて戦ひ、畠山勢は打負けて武藏國へ引退き、更に其の一族、河越稻毛、小山田、江戸、葛西七黨の兵二千餘騎を率ゐて、三浦の衣笠城に押寄せ、一日一夜攻め續けて城を陥れ、

大介は遂に打死を遂げ、其の子供等は九里濱の浦より船に乗つて安房上總へ落ち延びまして御座る。』と註進に及んだ。

朝敵捕

平家の人々は、この註進を聞いて、都遷以後萬事不愉快の折柄であつたから、若い元氣の輩は戦でも始まれば好い、一番先に征伐に出かけてやらうなぞ、云つてゐた。

此時畠山庄司重能、小山田別當有重、宇都宮左衛門朝綱の三人は、福原在勤であるが、畠山は、

「北條は頼朝と縁組みを致して居るから何とも分らぬが、其餘の輩は、よもや朝敵に加りは致すまい、信じ難い大庭の報告だ。」

と云ふと、畠山の言に同意する者もあり中には、「イヤ、今に天下の大變に成る。」

と憂へる者もあつた。

清盛入道は拳を握つて憤り、

「頼朝は、平治元年、父義朝が謀叛の節、既に誅すべき筈のところを、池禪尼の乞に依つて流罪に處したのぢや。然るに其の恩も打忘れ、當家に向つて弓を引くとは言語道斷、神も佛も何とてお赦しあらう、今に見よ、頼朝が天罰を蒙らうぞ。」

そも、我朝に朝敵の初めて起つたのは、昔日本磐余彦尊(神武)の御代に、紀州名草郡高雄村に、身短く手足長く、力人に勝れた一匹の大蜘蛛がゐて、之れが爲めに害を受くる人民が多かつた。捨て置かれぬと、官軍が退治に向つて、宣旨を讀みかけ、終に葛の網で壓し殺した。其れより以來、野心を抱いて朝廷に抗敵をした輩は、大石山丸、大山皇子、山田石河、守屋大臣、蘇我入鹿、大友真鳥、文屋宮田、橋逸勢、氷上河次、伊豫親王、大宰小貳、藤原廣嗣、惠美押勝、早良太子、井上廣公、藤原仲成、平將門、藤原純友、安倍貞任、宗任、前對島守源義親、悪左府、悪衛門督に至るまで、廿餘人に及んだが、一人として目的を達する者なく、皆骸を山野に曝し、首を獄門に懸けら

れた。

此頃(平家)こそ王威が輕んせられるけれど昔は宣旨を讀みかけると飛鳥も隨ひ枯れた草木にも花が咲き實が生つたものである。

延喜の帝(醍醐)が神泉苑へ行幸の時池の汀に一羽の鷺がゐた。藏人を召させられて、

あの鷺を捕へて參れ。」

この仰せがあつた。藏人は覺束なくは思つたが勅命なれば畏まつて進み寄ると鷺は羽づくろひして飛び去らうとした。

「宣旨ぞ！」

と六位は一喝した。鷺はびたりと其處へ蹲つた。其を捕へて奉ると、「宣旨に随つた段神妙である。」とお褒めあつて其の鷺を五位に叙し且つ今日より後鷺の中の王たるべしとの御札を親ら認めさせられ鷺の頸に附けて放させられた。

咸陽宮

異國にも此の例がある。秦の始皇帝の頃燕の太子丹といふものが秦國に囚はれの身となつて、十二年間牢獄に繋がれてゐた。或時燕丹涙を流して、

「暇を賜はつて、今一度故郷の老母に逢ひたう御座りまする。」

と歎願すると始皇帝は嘲笑ひ、

「鳥の頭が白くなり、馬に角が生えたらば、望み通り暇を取らせるであらうぞ。」

と云つたので、燕丹は天を仰ぎ地に俯して、

「願くは馬に角を生やし、鳥の頭を白くなし給へ。本國に歸して今一度母に逢はせ給へ。」

と一心に祈念すると、天地の神も燕丹の心を憐み給ひやがて角の生えた馬が

宮中に獻せられ、頭の白い鳥が禁苑の木に来て棲つた。

始皇帝は、これを見て、口約を重んじ燕丹を宥して本國へ還すことにしたが、燕國と楚國との國境の大河に渡した「楚國の橋」へ、官兵を先廻しして、燕丹が橋

を渡る時、その橋から落ちる様に仕掛けさせて置いた。

燕丹はそれとは知らず、橋を渡りかけると忽ち川の中へ落ちて了つた。けれども水には少しも濡れず、平地を行くやうに歩いて對岸へ著いた。自分ながら不思議なので、振顧つて見ると、數知れぬ龜どもが、水の上に甲羅を並べて、其上を渡らせて呉れたのであつた。孝行の徳を天地の神が憐み給うたのである。

燕丹は其後も始皇帝に隨はなかつたので、始皇帝は官軍を遣はして、燕丹を滅さうとした。

老であつたので、燕丹は驚き惶れて、田光先生といふ豪傑に助力を求めたが、先生は、最早餘程年

老であつたので、燕丹は驚き惶れて、田光先生といふ豪傑に助力を求めたが、先生は、最早餘程年
「騏驎は千里を飛ぶといへど、老いては驚馬にも劣る。君は吾が壯時の勇氣を聞いて頼まるゝであらうが、今は老いて何の役にも立たぬ。吾が代りに若い勇士を推薦致さう。」

と言つて、荆軻といふ俠勇の士を紹介した。燕丹は田光先生に、「穴賢々々。此事御他言あるな。」

「此事若し漏れたらば、吾れ第一に疑はれるで有らう。人に疑はれるより大なる恥は御座らぬ。」

と田光は、が門前の李の木に頭を打碎いて死んで了つた。

又、樊於期といふ勇士があつた。樊於期は秦國の將軍であるが、始皇帝の爲に親兄弟を滅されて、深い怨みを懷き、燕國に亡命してゐたのであつたが、燕丹は之を好遇して居た。始皇帝は、

「燕の地圖並びに樊於期が首を持參の者には、五百斤の黄金を與へる。」

と天下に布令を下した。荆軻は、樊於期を訪ね行き、

「君の首を始皇帝へ奉れば、五百斤の黄金を與へるとの布令が出た。君が首を貰ひ受け、吾れ之を持つて始皇帝に獻じたならば、喜んで實檢をするで有らう。其時劍を抜いて刺殺し、君が怨を霽すは容易な事と思ふが如何。」

樊於期は跳上り、大息を吐いて喜び、
「我が怨みは骨髓に徹して、忍び難いところなれども、到底彼に近づくの手段が無かつた。若し、まこと、始皇帝を討つことが出来るならば、我首を與へることは

塵芥よりも易い。」

自ら即座に首を切つて死んだ。荆軻は樊於期の首を函に盛つた。

爰に又十三歳で父の敵を討つて燕國に逃げて來てゐる者があつた。秦國の秦

舞陽といふ者で、彼が笑つて向ふときは稚子も抱かれ、又嘔つて向ふ時は大の男

も氣絶するといふ勇士である。此の者を案内者として秦の都へ出立した。

二人は其晩或る片山里に泊つて、其の近處に聞える管絃の調子を以て、事の成

否を占はせて見ると、

「敵の方は水、我方は火、白虹日を貫いて通らず、本意を遂ぐるゝ艱かし。」

と云ふのであつた。けれども今更引返しもされぬので、秦の都咸陽宮に著い

て、燕の地圖並びに樊於期が首持參の由を奏上した。

始皇帝は臣下に命じて之を受取らせようとしたが、荆軻は直接ならでは奉ら

ぬと云つて拒んだので、其ならばと直に接見の式場が設けられて、其處に二人が

召されることゝなつた。

咸陽宮は、平地より三里高く築上げられた所に皇城があつた。皇城内には、長

生殿があり、不老門があつて、黄金の日、銀の月を飾り、眞珠、瑠璃、黄金の砂を敷詰められ、その四方には、高さ四十丈の鐵の塼を繞らし、殿の上にも同じく鐵の網を張つてあつた。これは冥土の死の使を入れぬ爲めにしたものである。

燕の使者接見の式場は、阿房宮の中に設けられた。阿房宮は、始皇帝が政治を行ふ正殿で、東西九町、南北五町、高さ三十六丈、縁の下に五丈の幅が樂に立てられる。屋根は瑠璃の瓦で葺き、室内には金銀の板を磨いてある。

荆軻は燕の地圖を持ち、秦舞陽は樊於期の首函を抱いて、珠の階を登りかけたが、幾千の兵士が白刃を列ねて霜の林の如くなるを見て、秦舞陽思はずッナ／＼と慄えた。警固の者は若しや謀叛人かと怪しんで、秦舞陽を殿上へ登すまいとした。荆軻は振願つて、

「決して御懸念には及びませぬ。舞陽は田舎侍ゆる皇居の威嚴に心臆したので御座る。」

と云つたので、警固の武士も静まつた。

二人は始皇帝に近付き、燕の地圖並びに樊於期が首を御覽に入るゝ時、地圖の

櫃の底から、一口の劍が現はれた。始皇帝は之を見て、つと立つて逃げ出した、荆軻は無手と其の袖を掴み、劍を抜いて其の胸に擬てた。

庭上に控へてゐた幾萬の警固の武士は、救はうと思つても手の出し様がない。たゞ手に汗を握るのみである。既に一刺しと見えた時、始皇帝は斯う云つた。

「暫く待つてくれい。今一度後の琴を聞きたい。」
荆軻は流石に哀れと思つて之を許した。

始皇帝には三千人の后があつた。其中の花陽夫人といふは類ひない琴の名手であつた。此後の琴を聞けば、草木も動き、飛ぶ鳥も落ちんばかりであつた。

況んや、今を限りの窺聞に入れんと彈するのである、其の妙音に滿廷文武の臣は皆涙を催し、荆軻も自づと首をうなだれて聞き惚れた。后は一曲を終つて、次に又一曲を奏する、其歌に、

「七尺の屏風は高くとも
躍らばなごか越えざらん
一條の羅縠は勁くとも」

曳かばなごか絶えざらん」

ふと始皇帝は氣が付いて、荆軻が捉へた袖を引切り、後に建てられた七尺の屏風を躍り越えて、銅の柱の陰へ身を隠した。

荆軻は大に怒つて、手にした劍を投げ掛けた。始皇帝の前に立塞つてゐた一人の醫師は、其の劍に向つて薬袋を投げ合せた。劍は其の袋を貫いて、尙ほ徑六尺の銅柱を半ばまで截つた。荆軻は外に劍が無い、繼いで投げる事が出来なかつた。始皇帝は劍を取寄せて、荆軻を八裂にした。秦舞陽も其場で誅された。

間もなく燕丹も始皇帝のために滅されて了つた。

「燕丹同様、頼朝の滅亡する時も、遠いことでは御座りますまい。」

と清盛入道に追従を云ふ人も多かつた。

文覺荒行

文覺荒行

頼朝は平治元年十二月、父左馬頭義朝が謀叛に依つて、既に誅せらるべき筈であつたが、清盛の繼母池禪尼の嘆願に依り、永暦元年三月二十日、十四歳で伊豆の

北條蛭小島へ流されて、二十餘年の春秋を送り迎へた。

この頼朝が俄かに平家追討の旗上をなすに至つたのは、高雄の文覺上人に勸められたためであつた。

文覺上人は、渡邊遠藤左近將監茂遠の子、遠藤武者盛遠とて、上西門院(二條帝)の侍であつた。十九の年に道心を發し、髻切つて修行に出ようとした時、修行といふものは如何ほどばかり辛いものか試して見よう、と六月の風死して草もゆるがぬ炎天にある山里の藪に入つて、裸になつて仰のけに寝轉んだ。蛇も來て刺せば、蚊も、蟻も、蜂も寄つて簇つて螫つて螫した。七日間は身も動かさず、八日目に起上つて、

「修行といふものは、これ位のものか。」

と人に尋ねると、

「それ程であつたら、とても命が有るまい。」

と云ふのを聞いて、

「では、何の事も無い。」

と初めて修行の途に上り、先づ熊野へ參つて那智籠りを志し、行の試めに荒瀧に暫く打たれて見ようと瀧本へ行つた。

頃は十二月の初旬谷にも山にも雪が積つて、峯の風は吹凍り、瀧の白絲は垂氷となつてゐた。文覺はザク／＼と雪の上を踏んで降り、たき壺に頸まで浸つて

一心不亂に慈救の呪文を唱へ出した。

三四日間は瀧壺に浸つてゐたが、五日目になると、感覺が失くなつて、ばかりと浮き上つた。忽ちさつと推し流されて、岩角の中に浮き沈みして、五六町ばかり流れて行く其時一人の童子が忽然と現はれて、文覺の手を把り岸に引上げ、又忽然と消えて了つた。

外の修行者達が駭寄つて來て、焚火に炙りなごして介抱すると、文覺は間もなく息を吹返し、大の眼を噴らかして、

「我れ此瀧に三七日打たれて、慈救の呪文を三萬遍唱へんとの大願を立て、未だ七日にも過ぎざるに、誰が此處へは引上げた。」

其の様子を恐ろしさに、誰も何とも言はない、文覺は瀧壺に取つて返して、又頸

まで浸つた。

次の日に、八人の童子が現はれ、文覺が左右の手を把つて引上げようとしたけれど、散々掴合うて上らなかつた。

文覺はその次の日に、死骸となつて又浮上つた。すると此度は、角髪結うた二人の童子が瀧の上より降つて、煖く香しい手で文覺が頭から手の掌足の端まで撫てやつた。文覺は夢のやうに蘇つて、二人の童子に尋ねる。

「如何なる御方なれば、斯くまでも憐み給ふや」

「我等は不動明王の御使金迦羅童子、制多伽童子なり。文覺無上の願を發し、勇猛の行を企つ、汝等行いて力を併せよと明王の勅に依つて來れるなり。」

「して、その明王は何處へ坐し給ふ？」

「都率天に。」

と云ひながら、二人の天童は雲の上遙かに昇つた。文覺は合掌して、「さては我が行をば大聖不動明王も知召されたるか、あら難有や。」

と心勇み、又もや瀧壺へ歸つて打たれたが、其後は吹き來る風も寒くなく、落來る水も湯の様におぼえて、目出度く三七日の大願を遂げ更に千日間那智に籠つた。大峯に三度葛城に二度、高野、金峯山、白山、立山、富士山、伊豆、箱根、信濃の戸隠、出羽の羽黒を初め、日本國中殘る所なく修行して都へ歸つてからは、飛ぶ鳥も祈り落す靈效な修驗者といふ評判が高まつた。

勸進帳

其後文覺は高峯の山奥へ行つて行澄ましてゐた。

高峯に神護寺といふ山寺があつた。これは昔稱徳天皇の御時、和氣清麿が建てた寺である。扉は風に倒れ、莖は雨露に侵されて、住持の僧もなく、差入るものは日月ばかりであつた。文覺は如何にもして此寺を再建せんとの大願を發し、勸進帳を捧げ諸方を勧め歩いた。或時後白河法皇の法住寺の御所へ參上して、御奉加を乞ひ奉つたが、法皇には御遊の折柄とてお取上げがなかつた。大膽不敵の文覺は、御遊中とは知らず、お側の者が執奏しないのだと考へて、御庭の内へ

押入つて聲高らか、

「大慈大悲の君にて坐すに、なごて是程の事を御聽許あらせられざるべきや。」と勸進帳を目よりも高く押展けて高らかに讀み上げた。

沙彌文覺敬で白す。殊に貴賤道俗の助成を蒙つて高雄山の靈地に一院を建立し二世安樂大利を勤行せんと請ふ勸進の狀

夫れ以るに眞如廣大なり。生佛の假名を立つと雖も法性隨妄の雲厚う十二因縁の峯に覆ひ曇翳きしより以來本有心蓮の月光幽かにして未だ三毒四慢の大虚に顯はれず。悲しき哉佛日早く没して生死流轉の衢冥々たり。唯色に耽り酒に耽る誰か狂象踔猿の迷を謝せん。徒に人を誘ひ法を誘ふ是豈に閻羅獄卒の責を免れんや。爰に文覺適俗塵を擺つて法衣を飾ると雖も惡行猶心に逞うして日夜に作り善苗又耳に逆つて朝暮廢る。痛しき哉再び三途の火坑に歸つて長く四生の苦輪を廻らんことを。是故に無二の顯章千萬軸軸々に佛種の因を明し隨緣至誠の法一つとして菩提の彼岸に到らすといふことなし。故に文覺無常の觀門に涙を流し上下の眞俗を勸めて上品蓮臺に

縁を結び等妙覺王の靈場を建てんとなり。夫れ高雄は山堆くして鷲峯山の梢を表はし谷閑かにして商山洞の苔を鋪けり。岩泉咽んで布を引き嶺猿叫んで枝に遊ぶ。人里遠く囂塵なく咫尺好へに信心あるのみ。地形勝れたり尤も佛天を崇むべし。奉加微きなり誰か助成せざらん。風かに聞く沙を聚て佛塔を爲る功德忽に佛因を感ず。況や一紙半錢寶財に於てをや。願はくば建立成就して禁闕鳳曆御願圓滿乃至都鄙遠近里民緇素堯舜無爲の化を歌ひ椿葉再會の笑を披かん。特には又聖靈幽儀前後大小速かに一佛眞門の臺に至り心す三身萬徳の月を翫ばん。仍て勸進修行の趣蓋し以て斯の如し。

治承三年三月 日

文覺。

文覺流さる

折節法皇の御前には妙音院太政大臣が琵琶に奏して朗詠をなし按察大納言資方は和琴を搔鳴らし子息右馬頭資時は風俗催馬樂四位侍從盛定は拍子取りて今様を歌ひ院中さゝめき渡つて法皇も殊の外興に入つてお在になつてゐた

文覺流さる

處に俄かに文覺が勸進帳の大音聲が聞えたので、それが爲め調子も狂ひ拍子も亂れてしまつた。

法皇は興を醒まさせられて、

「何者の狼籍ぞ。疾く追立てよ。」

と仰せられた。院中の武士どもは我先に先に進む中に資行判官が眞先に

出て、
「御遊の折柄なるに何者ぢや。狼籍者奴。さつさと出て失せう。」

文覺は身搖ぎもせず、

「高雄の神護寺へ庄を一箇所寄進あらせられざる限りは、此處一寸も動き申さぬ。」

取つて押へようとする、と文覺は勸進帳を取直して、資行判官の烏帽子を踏と打ち落し、握り拳で胸を突いて仰向きに突き倒した。資行判官意氣地なく逃出して了つた。

文覺は懷より、馬の尾で柄を卷いた刀を出して、すらりと抜き放ち、寄つたら突

かうと身構へた。左に勸進帳、右に刀を持つたる様が、恰も刀を左右に持つたやうに見える。

公卿も殿上人も周章へて、御遊も遂に白け渡つた。院中は大騒動である。

「何事ぢや。」

と太刀を抜いて躍り出たのは、院の武者所たる信濃國の住人安藤武者右宗であつた。飛鳥のやうに飛び懸る文覺を、安藤武者は斬つては悪からうと太刀の背を取直して、文覺が右の肘を強かに打つ。打たれて疼む處を組付いて、上になり下になり孰も劣らぬ大力、暫く揉み合せてゐたが、其のうち多勢の者が駆寄つて遂に文覺を取押へ、繩を打つて門外へ引摺り出し、檢非違使廳の下部に引渡した。

文覺は下部ごもに引張られて立ちながら、御所を屹と睨まへ、
「奉加をなし給はぬ其上に、文覺に是程まで辛い目を見せ給ふ上は、今に思知らせ申さう。三界は皆火宅なり、王宮と雖も其難は通れられぬ、縦ひ十善の帝位に誇り給ふとも、黄泉の旅に出で給ふときは、牛頭馬頭の責を免れることは能

きさせられまい。」
と躍上り／＼つて罵つた。

「此法師奇怪至極禁獄させい。」

と文覺は獄屋に押籠められた。

烏帽子を文覺に打落された資行判官は、流石に恥しくて暫は出仕もしなかつたが、文覺を組伏せた安藤武者は其の功を賞せられ故參を越えて右馬允に任せられた。

間もなく美福門院がお逝れになつて、大赦が行はれた。其時文覺も赦されて獄を出た。

文覺は暫く地方にでも出ることか、又もや勸進帳を持ちながら、洛中洛外を勸誘して廻るしかも無遠慮に、

「此世は今に亂れて、君も臣も亡び失せて了ふぞよ。」
なご、云ひ觸らすので、

「此奴都には置かれぬ、遠流させよ。」

といふことになつて、遂に伊豆國へ流された。源三位入道頼政の嫡子伊豆守仲綱が其時の檢非違使であつた、仲綱の指圖に依り東海道より船にて伊豆國へ渡すことゝなつた。護送の爲め附いて行く二三の小役人が、竊かに文覺に向ひ、

「檢非違使の下役は斯ういふ時が儲け時で御座る、御便宜は計りまするが、御坊は平生澤山御懇意な人が有らせられることなれば、此の際土産や食料旅費なごお貰ひ集めなされませ。」

と暗に袖の下を強請つた。文覺は笑ひながら、

「左様の懇意は東山に一人だけちやが、何うちや、これより東山まで參るか。」

「參ります。早く文をお認め下され。」

と粗末な紙を持ち出した。文覺怒つて、

「斯様な紙に物は書かれぬ。」

と紙を投げ出すと、此度は厚紙を持つて來た。

「生憎此法師は無筆ぢや。汝等認めい。」

一人の小役人が筆を取つて、文覺の言ふまゝを筆記する。

「文覺は、高雄の神護寺造營の爲めに勸進帳を捧げて十方旦那を勸め歩いたが、斯様な君の世に逢うて、奉加を爲たまはぬ上に遠流せられて、伊豆國へ參る、遠路の事なれば、食料旅費等の準備が大切である、何卒此使に遣して戴きたい。」斯う書き取つて、小役人は、

「宛名は誰方で御座りますか。」

「清水の觀音ぢや。」

「御坊は廳の役人を嘲弄なされるのか。」

「いや嘲弄はせぬ。文覺は平常清水の觀音を何よりの憑みにして居つた、外に誰も助けて貰ふ心當りは無いのぢや。」

文覺を乗せた船は伊勢國の阿濃津を出帆したが、遠江國の天龍灘で大暴風に遭つて、今にも轉覆しようとした。水手梶取どもは觀音の名號を唱へたり、最後の十念を唱へたりする。

文覺は平氣で船底に高懸かいて寝てゐたが、愈々危ないとなつたとき、かつばと起上り、船側に立つて、沖の方を睨まへ、大音聲に、

「龍王！龍王！！」

と二聲叫んで、

「大願ある聖僧が乗つてゐる船を、何故に轉覆させようとはするぞ。天の罰を恐れぬ龍神共奴が。」

怒鳴りつけると、其の故か大暴風が間もなく静まつて、船は無事に伊豆國へ著いた。

文覺は京を出る日から、心に一つの祈誓があつた。それは、

「我都に歸つて高雄の神護寺の造營を爲すべきものならば、決して死なぬ。若し此願成就せぬものならば、道にて死ぬる。」

と云ふのであつた。伊豆に著くまで三十一日間文覺は斷食して船底で行をしてゐた。死ぬどころか氣力も衰へなかつた。兎に角尋常の人では無いと思はれる事が多かつた。

伊豆院宣

伊豆に流された文覺は近藤四郎國高に預けられて、奈古屋の奥に置かれてゐたが、其處から蛭小島は近いので屢々頼朝を訪ねて種々の話などしてゐた。ある時文覺は頼朝に、

「平家の小松内大臣殿は智勇勝れた名將であつたが、平家の運も末と見えて、去年の八月に薨せられた。今は源平兩家の中に貴殿ほど天下の將軍たる相を持つた人は御座らぬ。速かに旗上げを爲し日本國をお隨へなされ。」
勧め立てたけれど頼朝は、

「それは思ひも寄らぬこと、我は池禪尼に助けられたゆゑ其の恩を報ずる爲め、毎日法華經一部を轉讀する外に、何の望みも御座らぬ。」
文覺は重ねて、

「天の與ふるを取らざれば却て其咎を受け、時至りたるを行はざれば却て其殃を受くと云ふことが御座る。斯様に申せば其許の心を引くとも思召されようが、決して左様の儀では御座らぬ。先貴殿の爲めに我が志の深い様を御覽に入れう。」

文覺は懷より白布で包んだ一個の鬮體を取出した。頼朝は驚いて、

「それは何で御座る。」

「是こそ貴殿の父上故左馬頭殿の鬮體、平治の後は獄舎の前の苔の下に埋れて、後世を弔ふ者も無かつたのを、思ふ所があつて、愚僧が獄吏に乞受けて頸に懸け山々寺々を修行して二十餘年間お弔ひ申したれば、今は定めて修羅の苦みも脱れさせられて御座らう。文覺は左馬頭殿の爲めには、天晴忠義者で御座るぞよ。」

頼朝は直に文覺の言葉を確認した譯ではなかつたが、父の鬮體と聞いては流石に懐しくて涙を流し、良あつて、

「頼朝赦免を蒙つた上でなければ、旗上は出来申さぬ。」

「それは易い事で御座る。此の文覺が上京致して直に赦免を願つて参らう。」

頼朝は、

「御坊も勅勘の身にてありながら、他人の罪の赦免を願つて來るとは信じ難いところで御座る。」

とあざ笑へば、文覺は大に怒つて、

「吾身の咎の赦免を願ふでは無く、貴殿の事を申すに何の不都合が有らう。是より新都福原へ上るに三日、法皇の御所に罷り出で、院宣を乞ひ奉るに一日、往復都合七日八日も費れば可い。」

文覺は頼朝に暇を告げて名古屋に歸り、弟子ごもには伊豆の御山に七日參籠を爲ると云ひ残して出立した。

三日目に文覺は福原に著いて、前右兵衛督光能を訪ね、

「伊豆國の流人前右兵衛佐頼朝、勅勘を赦されて、院宣を賜はりなば、關東八箇國の舊臣を募集して平家を亡し、天下を鎮め奉ると申し居りまする。」

「自分も今は總ての官を罷められて心苦しい際である、法皇も押籠められてお在になるのであるから、如何あらうか覺束なけれど、兎も角も御意を伺つて見よう。」

光能は竊かに文覺の願意を奏上した。法皇は大にお歡びになつて、馳て平家追討の院宣を下し給つた。文覺は其の院宣を大事に首を懸け、急いで伊豆國へ

歸つた。

頼朝は文覺がなまじひな事を云ひ出して、又如何なる憂目を見せられる事かと案じ續けて居ると、丁度八日目の午刻に文覺が來た。

「さア、院宣で御座るぞ。」

と云つて頸の袋を外した。頼朝は院宣と聞いて恐れ入つて、新しい烏帽子淨衣に著更へ、手水嗽して、三度押戴いて院宣を抜き拜見するに、

類の年より以降平氏王化を蔑如にして、政道憚るなごなく、佛法を破滅し、王法を亂らんと欲す。夫れ我國は神國なり。宗廟相竝んで神德惟新たなり。故に朝廷開基の後、數千餘歳の間、帝位を傾け、國家を危ぶめんと欲する者皆以て敗北せずといふことなし。然れば即ち且つは神道の冥助に任せ、且つは勅宣の旨趣を守つて、早く平氏の一類を亡し、朝家の怨敵を退け、譜代相傳の兵略を繼ぎ、累祖奉公の忠勤を抽で、身を立て、家を興すべし者ば。院宣此の如く、仍て執達件の如し。治承四年四月十四日、前右兵衛督光能奉る

謹、上前右兵衛佐殿へ

伊豆院宣

と認めてあつた。頼朝は此院宣を錦の袋に入れ、石橋山の合戦の時も頸に懸けてゐたといふ。

富士川

頼朝が兵を起したといふことが聞えたので、福原では公卿の會議が開かれ、「兵力が増加せぬ内一日も早く討手を向けたが好い」と大將軍には小松權亮少將維盛副將軍には薩摩守忠度侍大將には上總守忠清將卒合せて三萬餘人九月十八日に新都福原を立つて、十九日舊都到著、二十日の日に東國へ攻下つた。大將軍小松維盛は二十三歳風采服装の美しさ繪も及ばぬほどある。副將軍薩摩守忠度も馬鞍鎧兜弓箭太刀に至るまで光輝くばかりの扮装であつた。副將軍忠度はある貴い官女の許へ通つてゐたことがある。ある夜例の如く通つて行くと大切な女のお客があつて、深夜までもお歸りがなかつた。忠度は軒端に佇んでゐたが、扇を荒々しく遣つた。すると主の女が、「野もせにすだく蟲の音よ。」

と優しい聲で口ずさんだ。忠度は俄に扇を遣ひ止めて歸つて了つた。其後行つた時、

「何故扇を遣ひ止められましたか。」

と女に尋ねられて、

「姦しいと仰せられると解しまして、遣ひ止めました。」

と答へた。此度忠度が副將軍として東國へ下ると聞いて、其の女より小袖一襲に、一首の歌を添へて贈つた。

『東路の 草葉をわけん 袖よりも
たゝぬ袂の 露ぞこぼるゝ。』

忠度の返歌は、

『別路を 何か歎かん 越えてゆく
關もむかしの 跡と思へば。』

關も昔の跡と詠んだのは、先祖平貞盛が將門征伐の爲め東へ下つたことを思ひ合せたのであらう。

昔は朝敵征伐に向ふ將軍は、先づ參内して節刀を賜はつたが、此度は讃岐守平忠盛が前對馬守源義親追討の爲め、出雲國へ下向した例に依つて、鈴ばかりを賜はつたのを、皮の袋に入れ、家來の頸に懸けさせて行つた。

十月十六日には、駿河國清見關に著いた。都を出る時は、三萬餘人であつたが、沿道の兵が加はつて七萬に上り、先陣は既に蒲原富士川に進んでゐたが、後陣は未だ手越宇津谷に支てゐた。

大將軍維盛は、侍大將忠清を喚び、

「足柄山を越え、廣場へ出て一戰致さう。」

と云ふと、忠清が、

「福原を出發の際、軍は忠清に任せよと入道殿の仰せで御座つた。伊豆駿河の兵はまだ一騎も參らず、御方の軍勢七萬餘とは申せども、皆悉く烏合の衆、其上長途の進軍にて人馬とも疲れ果て、居ります。東國は草も木も皆頼朝に隨ひ居りますれば、其勢何十萬に上るか計られませぬ。唯今の處、先づ富士川を前に控へ、參るべき伊豆駿河の兵を待たせ給ふが上策かと存せられます。」

維盛も是非なく其説に同意した。

此時兵衛佐頼朝は、鎌倉を立つて足柄山を越え、段々に黄瀬川に到着してゐた。甲斐信濃の源氏どもが馳集つて一つになつた。駿河國浮島が原で勢揃へをする、都合其勢二十餘萬に達してゐた。

其日常陸源氏佐竹四郎の家來が文を持つて京都へ上るところを、平家方で捕縛した。上總守忠清が取調べて見ると、文は四郎が女房の許へ遣はす文であつた。

忠清は佐竹の家來に向つて、

「源氏の勢は如何程あるぞ。隠さず申立てい。」

「私は四五百千までは數を知つて居りますが、其から上の數は存じませぬ。併しこの七日八日の間は、後から〜と續いて、野も山も海も河も皆武者で御座ります。昨日黄瀬川で人の申すには、源氏の御勢は二十萬騎ちやと申す

忠清はこれを聞いて、

「残念な事をした。一日も早く討手を下させられたらば大庭兄弟、畠山が一族は御方に参らぬことはなかつた。彼等が来たらば伊豆駿河の勢は皆平家方に随ふ筈であつたものを。」

と後悔しても甲斐はなかつた。

大將軍維盛は關東の事情に精通せる長井齋藤別當實盛を召して、

「實盛、汝程の強弓の精兵が、八箇國には幾何あるぞ。」

齋藤別當はあざ笑つて、

「君は實盛を左程の強弓と思召されますか。私の矢は僅か十三束で御座ります。實盛ぐらゐの射手は關東には幾何も居ります。凡そ強弓と申す名のあるもので、十五束以下を引く者は御座りませぬ。弓の強さも偏強な者が五六人して張ります。斯様の精兵が射ます矢は、鎧の二三枚は容易う射徹します。又大名と言はれる者は五百騎以上の部下を有つて居ります。馬に乗つて落つるなど、申すことは更に知らず、戰場に於ては、親も討たれ、子も討たれ、死ぬれば乗越え、戦ひます。西國の軍は之と違ひ、親が討

たるれば引退き、佛事供養を致し、忌明けてやつと又出陣を致し、子が討たれば愁歎いて再びは寄せませぬ。兵糧米が盡きますれば、春は田作り、秋刈り收めて出陣を致し、やれ、夏は暑い、冬は寒いと嫌ひますが、東國の軍に左様の手緩いことは御座りませぬ。其上甲斐信濃の源氏どもは案内は知つたり、富士の裾野より御方の背後を襲ふかも計られませぬ。斯様に申せば、大將軍の御心を慮させ申すやうで御座りますが、決して左様の儀では御座りませぬ。但し戦は強ち兵の多少には依らず、一に大將軍の計略に依ると承はつて居ります。」

之を聞いて平家の軍勢は、恐ろしい東國勢だなど皆慄上つた。

廿四日の早朝に富士川に於て、源平兩軍は開戦の矢合をすることゝ定まつた。其の前夜廿三日の夜に平家の兵どもが源氏の陣を見渡すと、伊豆駿河の人民が戦に恐れて、野に入り、山に隠れ、船に乗つて海河に浮んでゐる、其等の焚く火や點して、灯が、恰も陣營の火のやうに見えたので、

「さても源氏の陣の夥しい火ではある。誠に野も、山も、海も、河も、皆兵ちや、何う

したものか。」

と驚いて了つた。

すると其夜の夜半頃富士の沼にゐた多くの水鳥が何に驚いたものか一度にばつと飛立つた。その羽音が大風か雷のやうに聞えたので平家の軍勢は、

「それッ源氏の夜襲ぢや。昨日齋藤別當が云つた通り甲斐信濃の源氏等が富士の裾野から背後へ廻つたに相違ない。何十萬騎あるやら引包まれては一大事兎も角此處は退却せよ。」

と取る物も取りあへず我先きにと逃出した。餘りに周章で騒いだので弓取る者は箭を忘れ、箭を取る者は弓を持たず、他の兜を取つて冠れば、我馬には他が乗る中には繋いだ馬に跨つて鞭を當て、頻りに杭を廻つてゐる者もある。其邊近き宿々の遊君遊女を集めて酒宴をしてゐた者もあつたが、此の騒動で女共は頭を蹴破られたり腰を踏み折られたり、悲鳴を揚げて逃げまはる。

二十四日の早天となつた。源氏の兵二十萬富士川に押寄せて、天地も搖げと三度関を作つたが平家方は静まり返つて音も爲ない。

斥候の兵を出して見ると、

「皆落ち失せて、平家の陣には蠅一匹も居りませぬ。」

と云つて歸り、敵の殘した鎧を持つて來た者もあれば、大幕を取つて來た者もあつた。

頼朝は急いで馬を下り、兜を脱ぎ、手水嗽をして、遙かに王城の方を伏拜み、

「これ全く頼朝一個の功名でなく、偏に八幡大菩薩の御計ひである。」

と感謝した。さて近々に平定すべき所なればと豫め、駿河國は一條次郎忠頼に、遠江國は安田三郎義定に預け、追撃を止めて、根據地地方を固めるため直ちに鎌倉へ凱旋した。海道宿々の遊君遊女どもは、

「意氣地の無い討手の大將軍殿ではある。戦には見逃するさへ見苦しいのに、平家の人達は聞逃をされたわ。」

と笑ひものにした。落書も亦尠くなかつた。都の大將軍を宗盛と云ひ、討手の大將軍を權亮と云ふものだから平家をひら屋と詠みなして、

「ひらやなる　むねもり如何に　騒ぐらん

柱と憑む すけを落して。」

「富士河の

瀬々の岩こす

水よりも

早く落ちたる いせ平氏かな。」

又侍大將上總守忠清が富士川に鎧を捨てたのも詠んであつた。

「富士河に

鎧は捨てつ

墨染の

衣たいいきよ 後の世のため。」

「たいいきよは

にげの馬にぞ

乗りてける

上總 鞆 かけてかひなし。」

五節沙汰

大將軍權亮少將維盛は十一月八日に福原へ歸り著いた。清盛入道は大に怒つて、

「維盛を鬼界が島へ流し、忠清を死罪に行へ。」

と嚴命した。翌九日平家の侍共老少數百人參會して、忠清が死罪の當否に就

て評定した。主馬判官盛國進出で、斯う言つた。

「日頃忠清が不覺者とは思はれませぬ。彼が十八歳の時鳥羽殿の寶藏に、五畿

内一の惡黨二人逆籠つたのを、吾れ搦捕らうと申す者が一人もなかつたに、忠

清唯だ一人白晝に扉を越えて躍入り、一人は討取り、一人は搦捕つて勇名を揚

げたほどの勇士なれば、此度の不覺は徒事では御座りませぬ。是に就けても

能能兵亂の御慎みあるが宜しからうと存じまする。」

十日になると、權亮少將維盛が右近衛中將に昇進した。此度坂東へ討手には

向つても、何の手柄も仕出かさぬに、何の爲の行賞だらうと世人は怪んだ。十一

日には、清盛入道の四男頭中將重衡が、左近衛權中將に昇進した。十三日には福

原の内裏落成して、主上の御遷幸があつた。本來ならば大嘗會も行はるべき筈

であるが、福原の新都には大極殿もなく、其外儀式を行はせらるゝ事が出来ない

のみならず、御神樂を奏せらるべき所も、宴會を行はせらるべき所もないので、今

年は唯新嘗會五節ばかり行はせらるゝことゝなつた。其の新嘗祭も舊都の神

祇官で行はせられた。五節の舞は天武天皇の時吉野宮にて月五え嵐烈しかつ

た夜御心を澄まして琴を弾じてお在になると天女が天降つて五度袖を翻へして舞うた。それが五節の舞の初めである。

都遷

福原へ都を遷されたことに就いては、上下共に不平の聲が多く比叡奈良を初め諸寺諸社に至るまで其の不可なることを愁訴するので、流石横紙破りの清盛入道もとうとう我を折つて、俄に十一月二日都還りが行はれた。福原の新都は北に山を負ひ、南に海を抱いて波の音喧しく、潮風烈しき所であるためか、新院(高上)何となく御不例勝ちであらせられたので、急いで福原を出させられた。中宮(法皇)も御幸を仰出され攝政太政大臣以下の卿相雲客、我もくも供奉し、清盛入道及び平家一門の人々も皆引上げた。あれほど厭だつた新都に誰も残るものは無い、片時を争うて京都に歸つてしまつた。

法皇上皇は六波羅の池殿へ御幸あり、主上は五條の内裏に行幸あらせられた。俄の事とて宿所を持たぬ人が多かったので八幡賀茂、嵯峨太秦、西山、東山の片邊に

著いて、御堂の廻廊や社の寶殿などに、相當な身分の人、一時を過すのであつた。元來此度の遷都の真意は、舊都は比叡や奈良が近くて、やゝもすれば聊かの事に日吉の神輿、春日の神木を擔ぎ出すので面倒である、新都は山川を隔て、里程も遠いから、左様の煩はしい事も少からうといふのが、清盛の趣旨であつたといふ。同二十三日、近江源氏を攻めんが爲め、大將軍には左兵衛督知盛、薩摩守忠度、都合三萬餘人を率ゐて出發し、山本、柏木、錦古里などの溢れ源氏を攻め落して、其れより美濃尾張へと攻め下つた。

奈良炎上

奈良では高倉宮を御迎に參つた廉に依り、三井寺に次いで征伐があるといふ評判が立つたので、興福寺の大衆が蜂起した。そこで關白殿よりは、若思ふことがあるならば、穩便に幾度も奏聞するが可い、安りに騒動を致すなど、有官別當忠成を慰撫にやつたが、大衆は忠成を乗物より引摺り落し、「唇を切つてしまへ。」と騒いだので、忠成は蒼くなつて逃げ歸つた。次に右衛門督親雅を遣したが、こ

れも「皆切」れと騒がれて逃歸つた。其時勸學院の下部二人が鬚を切られた。奈良の大衆は、大きな木製の頭顱を作つて、清盛入道の首と名づけ、打つたり踏んだりして騒いでゐた。荷も今上天皇の外祖たる清盛入道に、斯様の大人氣ない事を爲る南都の大衆は、天魔の所爲かと思へた。

清盛入道は、先づ奈良の狼藉を静めんと、妹尾太郎兼康を、大和國の檢非所に補した。兼康は五百餘人を率ゐて馳向つた。清盛は、

「衆徒が狼藉に及ぶとも、對手になるな、甲冑も着けるな、弓箭も帶つな。」

と注意してやつたのであるが、奈良の大衆は、さうとも知らず、兼康を攻撃して六十餘人を捕へ、一々首を斬つて猿澤池の端に懸け並べた。

これを聞いた清盛入道は大に怒り、「さらば南都を攻めよ。」と命令を下し、大將軍には頭中將重衡、中宮亮通盛都合其勢四萬餘人、奈良へ向つて出發した。

奈良では老少七千餘人、奈良坂般若寺二箇所の道を掘切り、垣を結び逆茂木を引いて待受けた。

平家方は四萬餘人を二手に分け、奈良坂般若寺の二ヶ所に押寄せ、ドツと関を

作つた。大衆は徒歩で防ぎ、平家方は馬で攻めるので、瞬く間に大衆は残り少く討たれた。

早朝より合戦を始めて、一日戦ひ暮して夜に入つて、奈良坂も般若寺も破られた。大衆は思ひ／＼に落ちて行つた。其中に坂四郎永覺と云ふ勇僧があつた

が、崩黄威の鎧に、黒糸威の腹巻を重ね着て、茅の葉のやうに反つた白柄の大長刀と黒漆の大太刀とを右左に持ち、同宿同心十餘人を前後左右に立て、手搦門より

打つて出た。これが爲めに討たれた平家方は、少くなかつた。されども多勢の事とて、入替り立替り攻めたので、永覺の手も者も皆討たれて了つた。最早これま

で、永覺は唯一人南を指して落ちて行つた。夜軍になつて、大將軍重衡般若寺の門前に立ち、

「闇い／＼火を懸けい。」

と命じたので、播磨國の住人福井庄の下司次郎大夫友方といふ者、楯を破つて松明にして、民家に火を放つた。

十二月二十八日の初夜の刻であつた。火元は一ヶ所だけであつたが、折節風が

烈しかつたので焔は渦を巻いて多くの伽藍に燃え移つた。

恥を思ひ、名を惜む大衆は奈良坂般若寺で討死し、然でない者は吉野、十津川方面へ逃げ、老僧、修學者、女童どもは若しや助かる事もやと、大佛殿の二階の上、興福寺の内などへ、我先きにと逃入つた。大佛殿の二階の上には千餘人も上つて、追ひ来る敵を拒ぐために梯子を引いておいた。

敵よりも早く猛火が押懸けた。喚き叫ぶ聲、焦熱、大焦熱、無間地獄の罪人もこれには過ぎじとばかりに見えた。

藤原氏の氏寺たる興福寺も焼けた。聖武帝御建立の東大寺も焼けた。法相三論の法文、聖教總て一巻も残らず灰と化した。興福寺東金堂の釋迦、如來、西金堂の觀世音菩薩も焼けさせられた。特に東大寺の金銅十六丈の盧遮那佛は支那印度にもなき無双の巨像であつたが、毒煙の爲めにお頭が落ちてしまつた。焼死した者が大佛殿の二階のみで千七百餘人、興福寺で八百餘人、其外合計三千五百餘人、戦場の死者が千餘人に上つた。

二十九日、頭中將重衡は奈良を滅して京都へ歸つた。清盛入道は憤が晴れて

深く悦んだ。中宮(建禮)一院(後白河)上皇(高倉)は惡僧を殺すは兎も角多くの寺院を破滅せしめたことを殊の外歎かせられた。

衆徒の首は大路に引廻はして、獄門に懸けさせようと初は公卿達も決議して居たけれども、東大寺、興福寺などの名刹が焼却された淺間しさに、其儘何の沙汰もなく、彼處、此處、溝や堀に捨てられた。斯くて治承四年も暮れた。





卷第六



新院崩御

治承五年正月一日宮中では東國の兵亂奈良の火災の爲めに朝賀の儀式も停められた、主上の出御もあらせられず、音楽も舞樂も奏せられず、吉野の國栖も参らず、藤氏の公卿一人も参内しなかつた。二日の殿上の宴會も停止されてひっそりと寂しいことであつた。法皇は、

『四代(二條、六條)の帝王は、我子、我孫なるに、如何なれば萬機の政務を停められて、空しき年月を送るべき。』

と歎かせられた。

五日に、奈良の各僧官——僧正、僧都、律師など皆剝奪されて了つた。

毎年正月八日より十四日まで行はれる、天下泰平の御祈念たる御齋會だけは今年も行はれることとなつて、奈良の僧とては誰も居なくなつたものだから、三論宗の學匠、成法已講が、勸修寺に忍んでゐたのを召出して、形ばかり濟んだ。奈良の僧徒は、老いたるも若きも、射殺され、斬殺され、焼殺されて殆ど亡び、繼に生残つた者どもは、山林に隠れてしまつて、奈良に留まる者は一人もなかつた。中にも、興福寺別當花林院の僧正永圓は、佛像經卷の焼失する有様を見て、あゝ情ないと思ひ、哀しみ傷んで、其より病氣となつて終に歿した。この永圓は心優しい人であつた、ある時郭公の啼くのを聞き、

「聞く度に 珍しければ ほとゞぎす

いつも初音の 心地こそすれ。」

といふ名歌を詠んだので、初音の僧正と呼ばれてゐた。

高倉上皇は、一昨年法皇の鳥羽殿に押籠めさせられた事、昨年高倉宮の討たれさせられた事、又は都遷など種々御憂慮の事が重なつたので、御健康を害なせられたところに、今又東大寺興福寺の亡びたことを聞召して、御惱一しほ重らせられた。

れた。

法皇は深く御心配あらせられたが、主上は十四日、遂に六波羅池殿にて崩御あらせられた、御齡僅に二十一歳。其夜東山の麓、清閑寺に於て御火葬に爲し奉つた。澄憲法印は御葬送に參會せんと、比叡山より急ぎ下つたが、途中でもはや煙と立上らせ給ふのを眺めて、泣く／＼、

「常に見し 君が行幸を 今日問へば

歸らぬ旅と 聞くぞ 悲しき。」

又ある宮女は崩御と承はつて、

「雲の上に 行末遠く 見し月の

光消えぬと 聞くぞかなしき。」

世を憂へ民をあはれみ學問を興し禮儀を正させられ、延喜天曆の帝に比して、末代の賢王と申すべき方であらせられたので、月日の光りを失ふ様に上も下も舉つて惜しみ哀しんだ。

紅葉

高倉上皇は、また幼少の御時より、慈悲深い方であらせられた。承安の頃は、十歳ぐらゐであらせられた。紅葉を深くお好みになつて、宮城内に小山を築かせ、櫓、鶏冠木など、美しい紅葉したのを植ゑさせ、紅葉山と名付けて、毎日御覽あらせられた。

ある夜暴風雨が、あつて紅葉を皆吹散らしてしまつた。丰殿寮の奴どもが、お庭掃除に来て、散り敷いてゐる紅葉を掃き寄せ、散り残つてる枝をへし折つて、折柄寒い朝だつたので、其を焚いて酒を煖めなごした。

毎朝、主上が御覽あらせられるのだから、其の朝も掛りの藏人が、行幸の前に、検分に行つて見ると、紅葉は跡形もないので、

「如何致した。」

と尋ねると、薪にして酒を煖めましたと答へた。

「怪しからぬ。御寵愛の紅葉をば左様なことを致して………汝等は禁獄流罪

にも及び、我身も如何なる御叱りを受けよう。」

と心を痛めてゐるところへ、主上はお目覺めあるや直ぐ、御氣入りの紅葉山に成らせられたが、紅葉が一葉もなくなつてゐるので、不審に思召して、御尋ねあらせられた。今は藏人は、是非もなく有の儘を奏聞した。

主上は御快氣に打笑ませられ、

「林間、煖酒、焼紅葉」と云ふ詩の心をば、彼等に誰が教へて、おもしろいことを致した

たものよ。」

と何の御咎めもなく、却つて御感に預つたし。

又安元の頃のことであつた。或る處に行幸あらせられた晩霜夜で、事の外寒かつたので、御寢覺めがちにて、御寢もなにかねた。良深更に及んで人の叫ぶ聲がした、供奉の人々は聞きも附けぬに、主上は御耳敏く聞召して、

「唯今叫ぶは何者か、見て參れ。」

と仰せられたので、宿直の殿上人が、瀧口の武士に命じて取調べさせると、ある辻で、長持の蓋を提げた賤しい少女が泣いてゐた。「何故今頃泣いて居るのか。」

と尋ねると、法皇御所に仕へてゐる宮女の召使であるが、貧しい主人が此程漸くの事で仕立てあげた衣を外に持つて行く途中、二三人の荒くれ男に遭つて、その衣を奪取られたので泣いて居ると言つた。そこで瀧口の武士は、此少女を連れ歸つて、其の趣委細奏聞に及ぶと、主上聞召して、龍顔より御涙を流させ給ひ、

「お、無慚、何者の仕業ぞ。堯の代の民は堯の心の直なるを以て心となしたる故に皆直なりとある。今の代の民は、朕が心を以て心とするが故に、都の中にも左様な罪を犯す者がある。是朕が恥である。其の少女の奪はれた衣は如何なる物であつたか。」

と仰せられたので、取調べて然々の品と申上げた。すると直ぐに中宮(門建禮)へ御沙汰があつて、左様の衣は無いかとお尋ねになつた。間もなく先よりも遙かに好い衣をお遣はしになつたのを、彼の少女に賜はり、又々奪はれてはと御氣遣ひがあつて、瀧口の武士數人を附けて、主人の宮女の局まで送り届かせられた。

葵前

或る時、中宮の官女に使はれてゐる少女が意外に、主上の御寵愛を蒙る事になつた。一時の疎かなことではなく、深く御心に掛けて居させられる様なので、主の女官も遠慮をして、今迄の様に召使はないのみならず、却つて主の如く尊敬して懇に待遇してゐた。

今に女御后とも爲り、行く／＼は國母仙院と仰がれる方かも知れないと、葵前と言つた。其の少女をば、内々ではもう葵女御など、稱つてゐた。

主上は之れを聞召して、更に葵前をお近づけにならなくなつた。世の謗を憚らせ給うたのである。併し其より鬱々として樂ませられず、御惱とて多くは寢殿にのみお在になつた。關白基房は此御様子を聞いて、お慰め申上げようと思つて急ぎ参内して、

「左様に御慮に懸らせられる事を、何憚からせたまふべき、その女御召しあらせられませ。家柄などに就ての御詮議ならば、其は御無用、直様基房の養女として差上げます。」

と申上げたけれども、主上は、

「いや、讓位の後は兎も角も、在位の間に左様の事を致しては、後代の謗りとならうぞ。」

と遂に御聞入が無かつた。其後主上は平兼盛の歌、

「忍ぶれど 色に出にけり 我が戀は

物や思ふと 人の問ふまで。」

此の歌を薄様にお書きになつたのを、冷泉少將隆房が頂戴して、葵前に交付した。葵前は押戴いて懐に入れ、顔を赤めながら、病氣と申して里へ退つたが僅か五六日打臥して終に歿くなつてしまつた。

「爲君一日思 誤妾百年身」といふ古人の詞は、斯様の事を云つたものであらう。昔唐の太宗が鄭仁基の娘を元觀殿に入れようと思はれた時、彼の娘は既に陸氏に婚約があると、魏徴に諫められて思ひ止られた事と、少しも違はぬ潔い御心操であつた。

小督

主上の御憂鬱を慰めまゐらせんが爲め、中宮の御手許より小督殿といふ方をお側に差上げさせられた。小督殿は櫻町中納言重教卿の姫君で、禁中第一の美人、加之類なき琴の名手であつた。

小督殿は、初め、冷泉大納言隆房卿の少將であつた頃に見初められ、少將より歌を詠み玉章をやつて、小督殿の心を靡かさうとしたけれど、更に動く氣色もなかつた、けれども少將の執心には女心の終には負けてしまはれた。併し此度は君のお召であれば是非もなく、飽かぬ別をせねばならなかつた。

少將は如何にもして、今一度小督殿を見んものと、参内しては、小督殿の局の邊を彼方此方と窺ひ歩くのであつた。小督殿は君へ召された上からは、少將が何と言はれても言葉交してはならぬと決心してゐられた。少將は若しや一首の歌を詠んで、小督殿の局の御簾の中へ投げこんだ。

「思ひかね 心は空に 陸奥の

ちかの鹽釜 近きがひなし。」

小督殿は、切めて返歌を思はれたが、君に對し奉つて恐れ多いと考へ、その

歌を手にも取らず、庭の外へ投げ出させた。少將は情なく思ひつゝ、人に看られてはと、拾取つて懐に入れ、家に立歸つて、

「玉章を 今に手にだに 取らじこや

さこそ心に 思ひ捨つとも。」

今は此世で逢見ることば覺束ない、いつそ死んだが優しと歎いてゐられた。

これを聞いた清盛入道は、中宮も我娘冷泉少將の妻も我娘小督に二人の聲を取られては、人聞きも宜しくない。何とかして小督を亡き者にせんと人に云つたことがある。

小督殿はそれを聞き、我身のうへは兎も角も、君の御爲め心苦しいことだと思ひ、ある夜密かに宮中を抜け出でて、行方を晦ました。

主上は一方ならず御落膽あそばされて、晝は寢殿にのみ籠らせられ、夜は南殿に出御あつて、月の光に御心を慰めさせられた。

清盛入道は此の御有様を聞き、

「さては小督故の御歎きか。さらば思ふ仔細がある。」

と一切宮女の御側に出ることを禁じた。人々が参内するのまでも、そねむものだから、入道に氣兼ねして誰も参内する者もなくなり、宮中は如何にも寂しくなつて了つた。

八月十日過の晩月は隈なく照つてゐても、主上は御涙に曇らせられ、月の光も臙に御覽えになるのであつた。

良深更に及んで、「誰か有る」と主上は人を喚ばせられた、暫くは御應へ申す者がなかつたが、少し離れて宿直してゐた彈正大弼源仲國が、度々喚ばせたまふ御聲を聞いて、「仲國」と應へて参つた。

「近う参れ。申付けることがある。」

仲國は何事の仰せかと御前近く参ると、

「汝は小督の行方を知り居らぬか。」

「一向に存じませぬ。」

「小督は嵯峨の邊片折戸とやらをした家にあると申す者があると聞いた。其家の主の名は解らぬが尋ねて行つて來れまいか。」

「主の名を存じませいで、とても尋ね當てられまいと存じまする。」
主上も有理と思召し、默然として御涙を流したまふ。お氣の毒に堪へず、仲國は心の中に、

「好く考へて見ると、小督殿は琴の名手であつた。此名月に君の御事を思つて、琴を弾かれぬことはよもあるまい。宮中で琴を弾かれた折は、自分は笛の役を仰せ付かつた事があつて、小督殿の琴の音色は耳に入つてゐる、何處で聞いても聞き解けることが出来よう。嵯峨の民家の數は幾何も無い、一軒々々に尋ね廻つたら尋ね當てぬ事はあるまじ。」

と思つたので、顔を上げ、

「主の名は解りませいで、尋ねて参りませう。さりながら尋ね當てましても、御書か何か賜はりませいで、浮の空と思はれませう。」

主上は、さらばと御書を下されて、寮の御馬に乗りて行けと仰せられたので、仲國は寮の馬に跨り、明月に鞭を掲げ、西を指して急がせた。

「小鹿なく　この山里の　嵯峨なれば

悲しかりける

秋の夕暮。

と基俊卿が詠まれた、其の嵯峨の邊へ著いて、片折戸した家を見附けては、此内か、と一々馬を停め、耳を敬て、みたけれども、琴弾く家は一向にない。もし御堂などへお籠りでもあるかと、釋迦堂を初め、其外の堂なども見廻つたが、小督殿に似た婦人も見當らなかつた。

仲國は此のまゝには歸られない、主上のさぞ御失望あらせられようと思へば、空しく歸つては歸らぬよりも悪い様に思はれる。いつそ此のまゝ、何地へなりとも逃げて了はうか、其も成らずと色々考へ迷つた。若しや法輪寺にでも月の光に誘はれて参られたのではあるまいかと、馬の首を其方に向けて急がせた。龜山に近いところに松の一叢がある、其の方に當つて幽かに琴が聞える様である。峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺束なくは思ひ乍ら、駒を早めて近寄れば、片折戸した家の内に、琴を弾いてゐる女があつた。

駒を停めて、ちつと耳を澄すと、紛れもない小督殿の爪音で、曲は想夫戀。さてこそ君の御上を思ひ出して、此曲を弾いてゐられたと、仲國は腰の横笛抜き出し

琴に和せて、少しばかり吹き鳴らし、さて馬を下りて、ほこ／＼と戸を敲けば、琴の音が鳴り止んだ。

「宮中より仲國が御使に参りまして御座る。お開けなさつて下されませ。」

左様名乗りながら敲くけれども、返事が無い。良あつて内より人の出る足音が聞える、悦んで待つてゐると戸を細目に開けて、愛らしい女の童が顔ばかりを差し出して、

「此處は宮中より御使など賜さるやうな所では御座りませぬ。御門違ひで御座りませう。」

仲國は返事をすれば、戸を締め、錠をさゝれるに違ひないといきなり戸を押開けて内に入り、妻戸の際の縁に上つて、

「何故斯様の所へお隠れになりますか、君は思に沈ませられて、御命も既に危く見えさせられます。これ御覽あれ。」

と御書を取り出して差出すと、女の童が取次で小督殿へ渡した。押戴いて看れば確かに君の御文であつた。小督殿は御返事を認め、仲國への禮物として女の

装束一襲を添へて渡した。仲國は、

「御返書を戴いた上は申すにも及びませぬが、仲國が折角参つたもので御座りますれば、直々の御言葉も承はらねば歸られませぬ。」

と云ふ、小督殿も尤もと領いて、

「御存じ通り、入道の餘りに恐しい事ばかり申されるゆゑ、ある夜竊かに内裏を紛れ出で、此處へ参つてからは、斯様のすまひ、琴など弾くことも無かつたのに、明日より大原の奥へ参ることゝなつたに就いて、名残を惜しんで、此家の主婦に、この夜更に立聞く人もあるまいなど、勧められ、流石に昔なつかしく、手馴れた琴を弾いてゐたところをつひ聞出されてしまひました。」

など、語りながら、宮中の事など思ひ出されたと見えて、ほろ／＼と涙を落される。仲國も共に泣きながら、

「明日より大原へと仰せあるは、若しや御姿を變へさせられう御心で御座りませぬか、左様の事なされては、君の御上を如何ならせられると思召す、決して其儀はなりませんまい。仲國承はつた上は、左様の事をおさせ申す譯には参りま

せぬ。此方を此處よりお出し申しては相成らぬぞ。」
 と供の者を留置き此の家を守らせて仲國は馬に打跨り、一散に宮中へ歸り著いた時は夜の引明け頃であつた。今は定めし御寝なつたであらう。誰を以て此次第を申上げようかと、南殿を指して參ると、主上はまだ昨夜のまゝに御座にましくして、

「南翔北嚮

難附寒温於秋雁

東出西流

唯寄瞻望於曉月。」

朗詠の句の如な御心持で蕭然として月を詠めてお在になる處に仲國つと參つて、小督殿の御返事を差上げた。主上は斜ならず御喜びあらせられ、
 「さらば、汝今夜參つて連れてまゐれ。」
 と命せられた。仲國は清盛入道の手前如何かとも躊躇したが、勅命なれば畏つて、人の車を借りて嵯峨へ向つた。小督殿が拒まれるのを様々に説いて宮中へ連れ歸つた。
 主上は小督殿を人に知れぬ所へ忍ばせて置いて、夜々お召しになつてゐたが、

其の中に姫宮が御誕生になつた。坊門女院とはこの姫宮の御事である。

清盛入道は何時か此の事を知つて、殺してしまふなど、怒つてゐたが、如何しか宮中より誘ひ出し遂に小督殿を尼にして追放した。其時二十三であつた。出家は元より望ではあつたけれど、思はぬ時に尼になされ、墨染の衣にやつれば、嵯峨の奥に栖まはれた。

主上は斯様の事なごで、快々として日を送らせられ、御讓位の後幾程もなく崩御あらせられたのである。

法皇には、打續き御歎きの御事が多くあらせられた。永萬には第一の皇子二條天皇、安元二年の七月には御孫六條天皇の崩御、其のあとに御契深かつた建春門院もお逝れになり、御涙未だ乾かぬ治承四年の五月には、第二の皇子高倉宮討たれ給ひ、引き續いて高倉天皇まで先立たせられたので、御涙の斷ゆる間はなかつた。

清盛入道は、餘り法皇に情なく當つたことを、流石に空恐しく思つたものか、安藝の嚴島の内侍が腹に生れた十八歳の姫君を差上げて、法皇をお慰め申さうとした。其日は平家を初め、他家の公卿達も供して、恰も女御の入内のやうな盛儀を極めた。其が高倉上皇の崩御後僅七日を過ぎたばかりであつたので、世間には批難の聲も有つた。

其頃信濃國に故帶刀先生義方が次男木曾次郎義仲と云ふ源氏があつた。父義方は久壽二年八月十二日、鎌倉の悪源太義平の爲めに討たれた。義仲の母は其時二歳の義仲を抱き泣く／＼、信濃へ下り、木曾兼遠が許へ行つて如何にもして育て上げてくれと頼んだので、兼遠が引請けて養育した。

義仲は成長するに従つて、風采も舉動も人に勝れ、心は剛に力も強く、弓箭打物取つては、昔の田村利仁、餘五將軍、致頼保昌先祖頼光義家朝臣にも劣るまじと思はれた。

十三歳で元服の時、義仲は八幡宮に參詣して通夜をなし、「我が四代の祖父義家朝臣は、此御神の御子となして、名を八幡太郎義家と號された。我も其の跡を襲がう。」と御寶前で誓取上げ、木曾次郎義仲と名乗つた。

義仲は折々兼遠に連れられて都へ上り、平家專横の實際を見て置いたが、ある時兼遠に對して、

「此頃兵衛佐頼朝は、東八ヶ國を討ち從へて、東海道より攻め上り、平家を追落さんと致す由、義仲は東山北陸兩道を從へて、一日も早く平家を亡し、頼朝と共に日本國に二人の將軍と仰がれうと思ふが如何。」

と云つた。兼遠は大に悦び、

「其の爲めにこそ、君を廿餘年間御養育申して御座る。斯様に仰せられるは流石に八幡殿の御末と頼しく存じまする。」

此より旗上の準備に着手し、廻文を以て先づ信濃國の彌井小彌太滋野行親を説くと直に同意した。之れを手始めに、信濃一國の武士共は皆義仲に附隨うた。上野國田子郡の武士共は、父義方の好に依つて、此も悉く從うた。平家の運の盡きる時節が來て、源氏年來の素懷を遂げられさうになつたのであらう。

飛脚到来

木曾と云ふ所は信濃の中でも南の端だから都には近い。平家の人々は東國の背く上に又北國もかど大に恐れ騒いだ。併し清盛入道は案外平氣で、

「縦ひ信濃一國の者共が、木曾に随ふとも、越後には餘五將軍の末葉城太郎助長、同四郎助茂の兄弟がある、兄弟共部下が多い、命令さへ下したらば苦もなく木曾を討ち平げるであらう。」

と云つてゐた。之れを聞いて安心する者もあればいや／＼今に天下の大事故爲るに相違ないと呷く者もあつた。

二月一日越後國の住人城太郎助長が越後守に任せられた。之は木曾追討の準備のためであつた。七日には大臣公卿達が兵亂鎮靖の祈禱として寫經をされた。

九日に至つて、河内國石川郡の武藏權守入道義基子息石川判官代義兼が平家に背き、頼朝に心を通はして東國へ下る由の註進があつたので、大將軍として源

太夫判官季貞攝津判官盛澄都合三千餘騎を率ゐて、河内國へ討手に向つた。

義基法師は手勢百騎ばかりを以て、早朝より合戦を始めたが、夜に入つて討死を遂げ、子息判官代義兼は重傷を負うて生捕られた。義基の首は、十一日都に上されて大路に曝された。

翌十二日九州の宇佐大宮司公通より飛脚が来て、鎮西の者共緒方三郎維義を初めとして、臼杵、戸次、松浦黨に至るまで、平家に背いて源氏に同心の趣を註進に及んだ。平家の人々は、東國北國の背くさへあるに、平家の領分たる西國までも源氏に味方するとは何事ぞと驚いて、力を落す。

十六日には伊豫國からも飛脚が来た。

伊豫國では、去年の冬頃から、同國の住人河野四郎通清源氏に同心の由が聞えたので、備後國の住人たる平家方額入道西寂は、三千餘人を率ゐて伊豫國へ押渡り、道前道後の境なる高直城に攻め入つたので、河野四郎通清は遂に討死した。折しも子息河野四郎通信は母方の伯父なる安藝國住人奴田次郎方に赴いた不在であつたので、父を討たれて無念に堪へず、父の仇西寂を如何にもして討取ら

んものど、機會を狙つてゐた。

西寂入道は四國を平定して、今年の正月十五日備後の鞆へ押渡り、遊君遊女どもを召集めて酒宴をしてゐると、河野四郎は決死の士百餘人を以て酒宴の席へ亂入した。西寂方にも三百餘人はゐたのであるが、俄の事とて周章て騒ぐを射伏せ切り伏せ、西寂を生捕つて伊豫國へ渡り、父通清が討死した高直城まで連れて行つて、鋸で首を切つたとも、また磔にしたとも聞えたが、其後は四國一圓皆河野四郎に附隨うたとの註進であつた。

又紀伊國の住人熊野別當湛増は、平家重恩の身でありながら、忽ち心變りして、源氏に同心の由が聞えた。

斯くも東西南北より逆亂の先表頻に至つたので、世は今にも亡びんと、平家一門にあらぬ人々までも嘆き悲んだ。

入道逝去

二月廿三日、~~後白河法皇~~後白河法皇の御殿に於て、俄かに公卿の會議が開かれた。前

右大將宗盛進出で、

「今度坂東へ討手向うたれども、格別の功名もなければ、此上は宗盛大將軍を承はつて、東國北國の凶徒等を追討致したい。」

諸卿皆之に同意して、

「宗盛卿の御言葉、誠に勇ましく存する。」

と、擲擲に及んだ。法皇も之を御嘉納あらせられ、

「公卿殿上人と雖も、苟も武官に在り、弓箭に携はつてゐる者は、皆大將軍宗盛に屬して、東國北國の凶徒等を追討せよ。」

と仰下された。宗盛は追討軍を點檢し、二十七日方に出發せんとする前夜より、清盛入道が發病したので、出陣を中止した。明くる廿八日もはや重態といふことが一般に知れ渡ると、京も六波羅も大騒ぎになり、「そら、やつた、それ見た事か。」など言ふものもあつた。

清盛入道は病みついた其日から、湯水も喉へは通らず、全身の熱さは火を焼くやうで、病褥四五間の處へ近づくと、もう熱さが堪へられぬ程であつた。入道は

唯、「熱熱！」と云ふばかり尋常の病氣とは思はれなかつた。遂に堪へ兼ねて、比叡山より千手井の水を汲み下して石槽に湛へ、其に浸つて冷して見たが、水は忽ち湧上つて直に湯になつて了つた。

餘りの苦しさに、寛の水で打たせると、焼けた鐵か石同様水は撥いて寄附かず、たま／＼中つた分は、焰と燃え烟となつて、殿中に充ち渡り、渦巻く炎は天井を衝いて立ち昇る。焦熱地獄の苦みも、これには過ぎじと見えた。

其晩入道の奥方二位殿は世にも恐しい夢を見た。火焰に包まれた一輛の空車が門内へ入つて來た。車の前後には牛の面に似た者や、馬の面に似た者などが附添つて、車の前には「無」といふ一字を顯はした鐵の札が打つてあつた。夢の中で二位殿は、斯んな問答をした。

「その車は何處より何處へ行くのぢや？」

「平家太政入道殿の悪行が重つたから、閻魔王宮よりの御迎で御座る。」

「あの札は？」

「南閻浮提金銅十六丈の廬遮那佛を焼亡した罪に依り、無間地獄の底に沈める

ことに閻魔の廳で決定し、無間の無を書いてまだ間の字を書かれぬので御座る。」

二位殿は夢から覺めると、汗びつしよりになつてゐた。夢の話をするに聞くと、人皆身の毛が彌堅つた。

入道の病氣平癒の爲めには、靈佛靈社へ金銀七寶を賽げ、馬鞍、鏡、兜、弓箭、太刀、刀に至るまで、取出し運び出して祈つたが、驗はなく、唯だ男女多くの子供達が入道の臥床を取巻いて泣き悲むのみであつた。

閏三月二日の日、二位殿は熱さを堪へて、入道の枕元に寄添ひ、

「日に日に頼み少う見えさせられますが、御氣のたしかなうち、何ぞ思召す事は、仰せ置かれませ。」

と勸めると、入道は息遣ひも苦しげに、

「保元平治以來、度々朝敵を平げ恩賞身に餘り、忝も一天の君の御外戚として、丞相の位に昇り、榮華既に子孫にも及びたれば、今生の望とては無い、唯だ一つ頼朝が首を見ぬのが心残りぢや。吾死すとも佛事供養に及ばず、堂塔建立も無

用急ぎ討手を下し頼朝が首を刎ねて我墓の前に懸けよ。今生後生何よりの供養は其ちや。」

と剛情な遺言をして、四日の日、苦しみぬいて落命された。

之が傳はると、馬車の馳せ違ふ音の仰々しさ、一天萬乗の君に何事が生じたとも、此れ程には騒ぐまいと思はれた。

今年清盛は六十四歳であつた。老死といふではないが運が盡きては何とも

致方が無い、身に代り命に代らんと志ざす武士どもは堂上堂下に並んで居ても

眼に見えず力に關らぬ無常の使は拒き戦ふ様も無い、死出の山三途の川も唯一

個で清盛は赴かれるのであつた。

同じく七日、入道の遺骸は愛宕で火葬にし、遺骨は圓實法眼か拾つて頸に懸け、

攝津國へ下つて經島に葬つた。

經島

清盛入道の葬式の夜、不思議な事があつた。

金銀を鏤め輪奐の美を盡した西八條の御殿が、其夜俄かに焼けて了つた。これは放火らしかつた。

又六波羅の南に當つて、人ならば二三十人ばかりの聲がして、

「嬉しや水、鳴るは瀧の水！」

と拍子を取つて舞ひ躍り、ごつと笑ふ聲が聞えた。如何様此は天狗の所爲で

あらう、と六波羅の若侍共百餘人、笑聲のする方へ尋ねて行て見ると、意外にも笑

聲は法皇の御所法住寺殿から起るのであつた。此御所には法皇は三年以來お

住ひが無い、備前前司基宗が御所預りを申付かつて居た。此日基宗の友達等が

酒を持つて寄集まり、斯ういふ時節だからと最初は、こつそり飲んでゐたが、其の

内に酔つて了つて躍り騒いでゐるのであつた。

六波羅の若侍共は其處へ躍り込み、酒に酔つてゐる者共三十餘人を搦捕つて

六波羅へ引立てたが、前右大將宗盛は仔細を取訊し左様に酩酊したる者を斬る

には及ばぬと、皆放免した。凡そ身分の上下に關せず家に死人があれば追善供

養をするのが例であるが、入道歿後は供佛施僧の營もなく、朝夕軍合戦の準備の

外に餘念もなかつた。

入道の遺骨を葬つた經島は、去る應保元年二月上旬に築き始めたが、八月二日の大暴風に崩壊したので、同三年三月下旬、阿波民部重能を主任として築かせ、人柱立てのような言ふ公卿達の議もあつたが、其も罪深いことだと見合せになつて、石の面に一切經を書いて築くことゝなつた。それで經島とは名附けられたのである。

慈心坊

「清盛公は凡人にあらず、慈悲(延暦寺座主)僧正の化身なり」と云ふ人があつた。其故は攝津國清澄寺に、慈心坊尊慧と云ふ僧があつた。元は叡山に居て多年法華の行者であつたが、後に山を出て此寺に住んだ。

去ぬる承安二年十二月廿二日の夜、尊慧が佛前の脇息に靠れて法華經を讀んでゐると、夢ともなく現ともなく、淨衣に立烏帽子を着て、草鞋脚絆した二人の男が書翰を持つて來た。「何處から參つた。」と尋ねると、「閻魔王宮よりの宣旨であり。尊慧も其人數たる上、急ぎ參勤せらるべし。」

承安二年十二月廿二日

閻魔應。

と書いてあつた。尊慧は否む事も出來ず、請書を書いて渡した。そして夢が覺めて、此の次第を院主の光影房に語つた傳へ聞く者身の毛をよだてた尊慧は、只管死期を俟つて念佛ばかり申してゐた。

二十五日の夜、尊慧は例の如く佛前で讀經をしてゐたが、夜半頃切に寢氣がさしたので、住房に歸つて臥た、暫くすると先夜の二人の男が遣つて來て、「疾く々々」と追きたたてたので、尊慧は寢床に入つてゐるのだから大法會に參列すべき服装でない、遲疑しては閻魔王に恐があるなど、意つた。すると自然に法衣が身に纏ひ付き、金の鉢が天から下り、二人の從僧二人の童子十人の下僧と、七寶の大きな車が寺の門前に現はれた。尊慧は喜んで之に乗り、西北の空に向つて翔けると、

程なく閻魔王城に到着した。

閻魔王宮の光景を見ると外郭は堂々たる鐵壁で、其の内に七寶を以て作つた大極殿がある。建築の宏大にして壯飾の華麗なること言語に絶してゐる。

さて、王宮の大法會も滞りなく濟んだ。參會の僧侶は大方歸つて了つた。尊慧は大極殿の南の中門に立つて、遙かに大極殿の玉座を見渡すと、冥土の官吏達皆玉座の前に畏こまつてゐる。尊慧は折角來た序に後生の罪障を尋ねようと思ひ、其方に向つて歩むと二人の從僧は箱を持ち、二人の童子は笠をさしかけ、十人の下僧は列を作つて從ひ、段々御前に近づくと、閻魔王以下悉く座を立つて尊慧を出迎へた。跟いてゐた從僧などは藥王菩薩や多聞天などの佛神であつて、皆本相を現はして、仍ほ尊慧にかしづかれるのであつた。

閻魔王は口を開き、

「參會の僧侶は皆歸り去つたに、貴僧一人此處へ來るは何故ぞ。」

「愚僧幼少より法華轉讀を勤めますれど、未だ後生の如何を知り申さず、依つて其をお尋ね申し上げん爲め留りまして御座りまする。」

「往生不往生は人の信不信にあり。汝は法華經讀誦の功に依つて、天上に生れんこと疑なし。」

と言ひ聞かせ、一面冥官に向ひ、

「此僧の一生の行は、作善の文箱に在り、取出して讀み聞かせよ。」

冥官は畏つて南の寶藏から文箱を持ち參り、蓋を開いて讀み聞かせた。思つたことも爲たことも過去の事が一々圖星を指して顯はれたので、尊慧は感涙を流して、

「願はくは苦界を離れて極樂往生すべき方法を示させ給へ。」

と歎願すると、閻王は慇んで、

「妻子王位財眷屬 死去無一來相親
常隨業鬼繫縛我 受苦叫喚無邊際」

と偈を誦んで尊慧に授けた。尊慧は悦ぶこと限りなく、

「南閻浮提洲大日本國に、平大相國と申す人は、攝津國和田岬に、四面十餘町の屋を建て、今日の大法會の如く、持經者を招いて、丁寧に勤行を致されます。」

と云ふと閻魔王は感嘆して、
『清盛入道は凡人にあらず誠は慈悲大僧正の化身なり。彼は天台の佛法保護の爲め、假に日本に再誕したる人なれば、我は日々彼を三禮せり、其の三禮の文を入道に傳へよ。』

「敬禮慈悲大僧正
示現最初將軍身」

天台佛法擁護者
惡業衆生同利益

と讀んで又之を尊慧に授けた。尊慧は閻魔王を三拜して南の中門を出て、再び車に乗れば十餘人の從僧等前後を守護し、東南に向つて空を翔り程なく清澄寺の住房に歸り著いたと思ふと、皆夢であつた。

尊慧は其後西八條の入道邸に參上して、此夢の始終漏れなく物語つた、入道は悦び斜めならず様々に持成し多くの引出物を與へた上、律師に昇せてやつた。此より後清盛を慈悲僧正の化身とは誰も知る様になつた。釋迦と提婆が道を別つて衆生を教化したと同じく、清盛の惡事も善事もつまりは世の爲め人の爲めであつたと見える。

祇園女御

又故老の人は清盛公はたゞの人ではない、實は白河天皇の御子であるといふものもあつた。其譯は永久の頃祇園女御とて白河院の寵姫があつた。女御は東山の麓祇園の邊に栖んでゐた。白河院は屢々女御の許へ御幸があらせられた。

ある時殿上人一兩人と北面の武士幾人かを御供で、忍びの御幸があつた。五月廿日頃の事で月は無い宵の内から雨が降つて物淋しい晩であつた。女御の宿近いところに御堂がある、其堂の傍より光物が現はれた、頭は銀の針を磨立てたやうに煌き、片手に槌のやうな物を持つてゐるのが、片手に持つる光り物に照らされて見える、何に様異様の者である。

「鬼ぢや〜。」

とお供の者が驚き騒いで片手の彼が打手の小槌といふものだらうなぞ、恐るゝ叫びた。其時平忠盛は、北面の武士として供奉してゐたが、院は忠盛に、

「汝より外にない、彼の怪しの者射殺すか、斬り留めるか致せ。」

と仰付けられた。忠盛は畏つて、

「多分狐か狸ぢや。射殺し斬殺すは興が薄い。一つ生捕つて呉れう。」

と思ひながら、心落ちつけて彼の者に向つて進み寄る、ばかりと光るかと思へば忽ち消え消えたかと思へば又ばつと光る、狙ひ澄して忠盛は、飛び蒐つて無手と組んだ。

組み伏せられて、わあ／＼と騒ぐ引き起して見れば變化でも何でもなく人であつた。供奉の人達も近寄つて灯を照しつけて見ると、六十ばかりの老法師である。祇園堂の御明を獻げる役目の老僧で片手には油壺を提げ、片手には土器に火種を入れて、時々吹きおこし吹きおこして來た、雨が降るので麥藁を束ねて冠つてゐたのが火の光で銀の針とも見えたのであつた。

仔細が判つて見ると馬鹿らしい。忠盛が輕率に射殺し斬殺すに、生捕らうとしたのは、誠に思慮深き振舞であつたと、院には御感おらせられて、御寵愛の祇園の女御を忠盛に賜された。其の時女御は懐胎であつたので、院は忠盛に、

「女子ならば朕が子にする、男子ならば汝育て、武士に仕立てよ。」

と仰せられた。

誕生の御子は若君であらせられた。忠盛は此事を院に奏上しようと思つてゐたが、好い時機がなかつた。ある歳熊野御幸のとき紀伊國の絲鹿坂で御休息あらせられたので、供奉の内にも忠盛は、篋の中の零餘子を採つて袖に盛り入れて、御前へ参り、謹しんで、

「いもが子は這ふほどにこそ成りにけれ。」

と申上げると、院には祇園の女御が産んだ子の事だと御心付きあつて、

「たいも取り取りてやしなひにせよ。」

と下の句を附けさせられた。

其後院は、若君がひびく夜啼きを爲されると聞召されて、

「夜啼きすと、たいもり立てよ、末の代に、

清く盛ゆる、こどもこそあれ。」

といふ御製を賜はつた。それで其若君を清盛と名乗らせた。清盛は十二歳

で元服して兵衛佐となり、十八歳で四位に叙せられて四位兵衛佐と呼ばれた。で、何にも知らぬ人々は、「華族同様の御待遇ぢや。」と怪んだ、事の仔細を御存じの鳥羽院は、「清盛が華族は他に劣るものではないぞ。」と仰せられた事があつた。

洲股合戦

清盛入道の歿後間もなき廿日の日、五條大納言國綱卿も歿くなつた。大納言は入道と特に親しい間であつたか、同じ日に病み附いて、同じ月に歿くなつたのは不思議であつた。

同廿二日、前右大将宗盛は院參して、法皇を法住寺殿へ御還幸を仰ぎ奉ると奏上した。

法住寺殿は、應保元年四月十五日に造營して、日吉熊野の兩社を近くに勸請し、築山泉水に至るまで、思召のまゝに出來たのであつたが、平家の暴威のため此三年はお住ひもなく、荒れるが儘に荒れてゐたのを、此度修理を加へて、御還を願

つたので、法皇は御悦び限りなく、急いで御還幸あらせられた。故建春門院のお住ひになつた方を御覽なさると、僅かの間に岸の松江の柳も高くなつてゐる、何かにつけて昔の事が思ひ出されて、御涙が浮ぶのであつた。

三月一日、奈良の僧官が皆赦されて原官に復した。三日には大佛殿再建の命が下つて、造營の主任として前左少辨行隆が奈良に下つた。行隆は先年八幡宮へ參詣して通夜をしてゐると、夢に御寶殿の御戸を開いて、角髪結うた天童が現はれて、

「吾は大菩薩の御使なり、大佛殿造營の時には、之を持つ可し。」

と言つて、一個の笏を賜はつたと夢見たが、覺めての後、其の笏は枕頭に残つてゐた。行隆は不思議の感に打たれながら、笏を懐中して歸り、深く納つて置いたが、其の後意外に南都は兵亂に焼失し、多くの同僚の中から此度果して此の大命を拜することになつた。

同月十日、美濃國から早馬を以て、
「源氏が既に尾張國まで攻め上り、道を塞いで人の通行を停めました。」

と註進したので、直に討手を差向けられた。左兵衛佐知盛を大將軍とし、左中將清經、同少將有盛、丹後侍從忠房、侍大將には越中次郎盛績、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清が従つて、都合其勢三萬餘人、尾張國へ發向した。

源氏方では十郎藏人行家、頼朝の弟僧の義圓等六千餘人、尾張河を隔て、對陣した。十六日の夜、源氏勢は河を渡つて平家の陣に切り入つたが、平家方は少しも騒がず、源氏の六千餘騎を中に取圍んで、夜明頃まで戦つた。十郎藏人行家遂に敗北して、河より東へ引退き、義圓は深入りをして討死した。

平家方は河を渡つて追撃した。源氏方は幾度も取つて返して戦つたが、多勢に無勢叶ふわけもなかつた。

行家は參河國に退き、矢矧川の橋を徹して防戦の準備をした。其處も平家方が押し掛けて攻め破つた。此の上猶も追撃したら、參河遠江は容易く平家方に附隨ふ筈であつたが、惜しいことに大將軍知盛が病氣となつて、參河國から引上げ、京都に歸つて了はれた。

僅一陣を破つたや、残黨を攻めなかつたから、此度も格別の効果はなかつ

た。殊に平家は小松内大臣續いて清盛入道の歿後は、運も末になることが見え透いてゐるので、年來恩顧の輩の外は附隨ふ者が少かつたのである。東國では草も木も皆源氏の旗風に靡き伏した。

喘濁聲

越後國の住人城太郎助長は、越後守に任せられた朝恩の忝さに、木曾追討の爲め三萬餘人を率ゐて六月十五日、信濃國へ出陣と定まつた。いざ出發と準備をする前夜の夜半過ぎ、一天俄かに搔曇つて、烈しう雷が鳴つて大雨が降り注いだ。暫すると、カラリと霽れて皎々たる月が輝いた。そして何處ともなく大空から、

「南閻浮提金銅十六丈の、廬遮那佛を焼亡し奉つた平家の方人する者爰にあり。いざ召取れや。」

と喘濁聲が繰りかへして聞えたので、助長を初め三萬餘人皆身の毛が彌堅つた。中には助長の出陣を中止させんと諫める家來もあつたが、弓矢取る身のそれも成らずと城を立ち出で、僅か二十餘町も進んだかと思ふ頃、一叢の黒雲が舞

ひ下つて助長が上を覆うたと見えたが、忽ち手足が凍んで落馬した。家來共は驚いて、輿に乗せて館へ連れ歸つたけれども、半日ばかりで息が絶えて了つた。飛脚を以て此の趣を都へ註進に及ぶと、平家の人々も皆恐れ戦いた。

七月十四日養和と改元になつた。其日筑後守貞能は肥後守に任せられ、筑前肥後の兩國を賜はつて、鎮西の叛徒鎮定の爲め、三千餘人を率ゐて出發した。

其日又大赦を行はれ、治承三年に流された人々が皆召還された。前關白基房入道は備前國より、前太政大臣師長は尾張國より、按察大納言資方は信濃國より都へ還つた。

同廿八日師長は法皇御所に參つて秋風樂を彈奏した。資方も其日院參した。法皇は御前に召させられて、

「如何に。此頃は田舎に住ひして、郢曲などは定めて忘れたであらう、先づ今様一つ仕つれ。」

と仰せられた。資方は拍子を取つて「信濃にあんなる木曾路川」と云ふ今様を流罪地の信濃で屢々聞いたことがあるので、其を歌つたのは、時に取つての高

名であつた。

横田河原合戦

太政官廳で八月七日、平將門追討の先例に依り、大仁王會を行ひ、九月一日、藤原純友追討の例に依つて、伊勢大神宮へ鐵の鐘兜を寄進したが、勅使として下向した祭主神祇權大副大中臣定高は、近江國甲賀の驛で病みついて、三日伊勢に著いて歿した。

朝敵調伏の爲めに五壇の法といふのを行つた降三世の大阿闍梨は、僧房の一室に寝たまゝ死んでゐた。いくら禱つても、神も佛も御納受が無いといふ事が明かであつた。

又命に依り、太元法を行つた安祥寺の實玄阿闍梨が獻つた書類を見ると、平家調伏の事が書いてあつた。此は何事だと問ひ訊かれると、實玄阿闍梨は、

「朝敵を調伏せよとの仰せで御座りましたが、つらく當世の有様を見まするに、朝敵は正に平家と存じまするに依り、平家を調伏致して御座りまする。」

と云つたので、「此法師は不都合な死罪か流罪かに行へ。」といふ議も出たが、匆忙の際で實行されず其儘になつて了つた。源氏の代になつて鎌倉に下つて此の次第を訴へると頼朝は之を賞して實玄阿闍梨を僧正に昇せた。

十二月二十四日、母后は院號を蒙つて建禮門院と申された。其年も暮れて養和二年となつた。

二月二十一日、太白星が昴星を侵した。天文要録に大白昴星を侵せば四夷起り、又將軍勅命を承けて國境を出づと書いてある。

三月十日、叙任の式があつて、平家の人々は大方進級された。四月十五日、前權少僧都顯真、日吉社に於て式の如く法華經一萬部を轉讀した。御結縁の爲めに法皇も御幸を仰出された。

之を何者が言曲たのか、法皇は平家追討を山門の大衆に仰付けられたのだと噂が立つた。武士共は内裏へ參じて、四方を警固した。平家の一族は擧つて六波羅へ馳集つた。本三位中將重衡は三千餘人を率ゐ、法皇を御迎の爲め日吉社へ向つた。

山門の方には又平家が山攻めに登ると聞えたので、大衆は坂本へ降り、會議を開いて應戰の策を講ずる。

法皇も驚かせられた。公卿殿上人も色を失つた。北面の武士の中には周章狼狽の餘り、黄水を吐く者が多かつた。山上洛中共に大恐懼を來した。

重衡中將は穴太の附近で、法皇を迎へ奉り、都へお供申した。結局平家追討も叡山攻めも皆跡形もない浮説であると分つた。「斯くては心

任かせに物詣も致されぬ。」と法皇は御嘆息あらせられた。廿日には飢饉疫病の祈願の爲めに二十二社へ官幣使を立てられた。

五月二十四日、又改元あつて壽永と號された。其日越後國の住人城四郎助茂が越後守に任せられた。兄助長死去の爲め不吉なりとて一應辭したけれど、勅命なれば是非もなく御請した。助茂は長茂と改名して、九月二日木曾追討の爲め、越後出羽と會津四郡の兵四萬餘人を率ゐて信濃國へ向ひ、九日横田河原に著いて陣を取つた。

當時依田城にゐた木曾義仲は、三千餘人を率ゐて城を出て、信濃源氏井上九郎

光盛が謀を用ひて三千餘人を七手に分ち、赤旗七旗を作つて押立て、彼處の峯此處の洞より横田河原へ押寄せると、越後勢は之を見て、「やあ此國にも御方が有つた。」と力附いて喜び勇んでゐるうち、木曾方は敵陣近くなつた所で、七手が一つになり、忽ち赤旗を切り捨て、豫て用意の白旗をさつと指上げ、関を作つて切り込んだ。越後勢は、

「すは謀られた。敵は何十萬騎あるか、取圍かれては叶はぬぞ。」

と周章ふためき潰亂して、或は河へ追入れられ、或は難所へ追落され、助かる者は稀にして討たるゝ者が多かつた。城四郎が頼みとした越後の山太郎、會津の乗丹房などの一騎當千の勇士共も討取られ、城四郎も深傷を負ひ、命辛々越後國に退いて、飛脚を以て、取敢へず都へ註進に及んだが、平家の人々は格別氣にも留めなかつた。

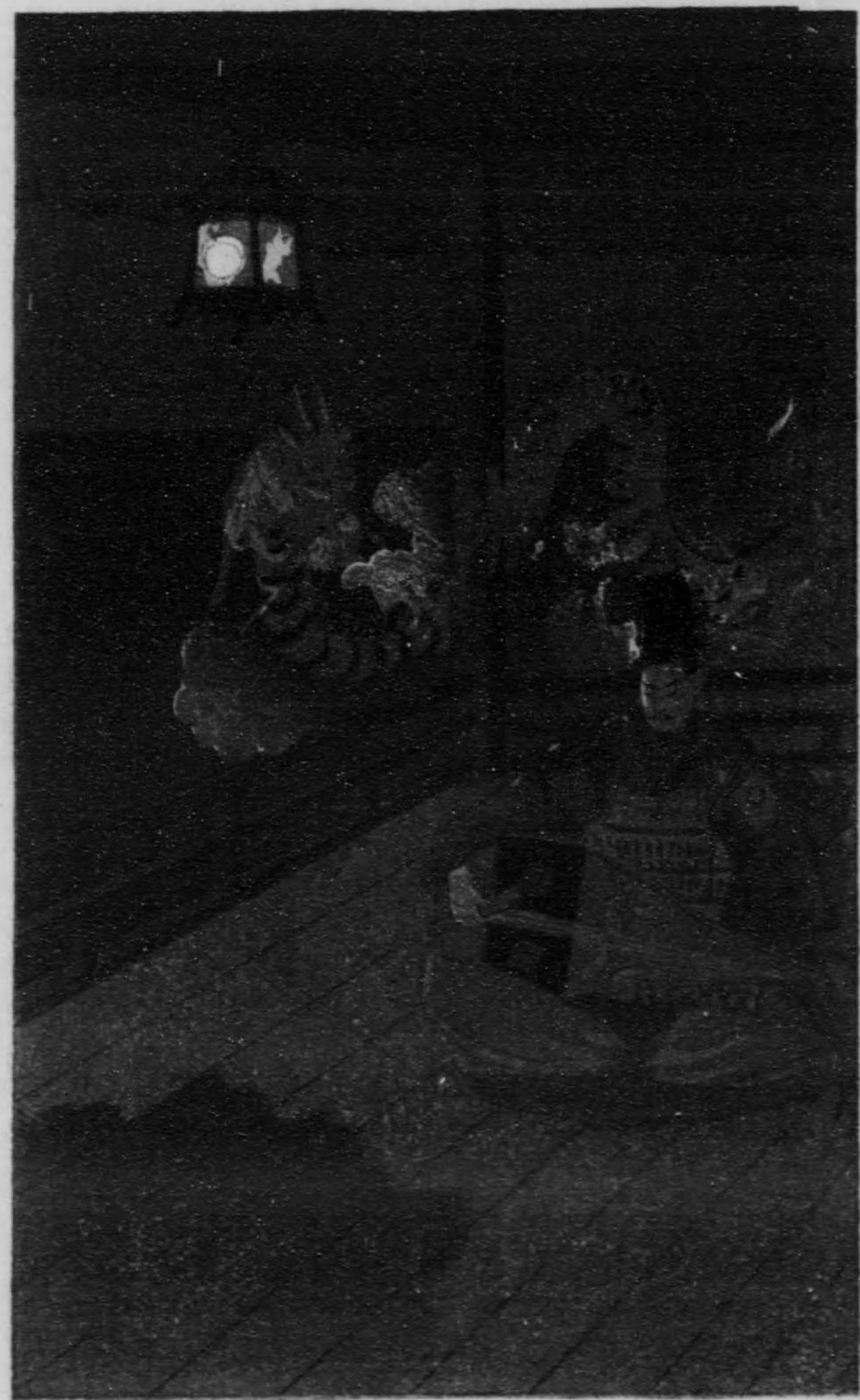
十六日前右大將宗盛は大納言となり、翌月三日内大臣に進んだ。七日御禮の爲め参内の時は、花山院中納言を初め公卿十二人扈從し、藏人頭親宗以下殿上人十六人が前驅した。列の内には中納言が四人、三位中將が三人まであつた。東

國北國の源氏共が今に都へ亂入する形勢となつてゐるのに、平家方は何處に風が吹くか波が立つかも知らぬ體で、華やかに日を送つてゐた。

其年も暮れて壽永二年の春が來た。

二月廿一日宗盛は從一位に昇つて、其日内大臣を辭した。

其の中に、段々南都北嶺の大衆、熊野金峰山の僧徒、伊勢大神宮の祭主、神官に至るまで、皆平家に背いて源氏に心を寄せざるやうになつた。天皇より宣旨を下され、法皇より院宣を遣はされても、地方に於ては宣旨も、院宣も平家の指圖と輕視して従ふ者はなくなつた。





北國下向

卷第七

壽永二年三月上旬、木曾冠者義仲と兵衛佐頼朝との間に不和を生じたといふ
ここで頼朝は義仲追討の爲め、十萬餘の兵を率ゐて信濃國へ向つた。依田城に
ゐた義仲は、三千餘人で城を出で、信濃と越後の國境の熊坂山に陣取つて待構へ
る。其内頼朝は善光寺に著した。義仲は乳母子の今井四郎兼平を使者として頼
朝の陣に遣はし、

「貴殿は東八ヶ國を打隨へ、東海道より攻上つて平家を追落さんとなされ、義仲
は北陸道より攻上つて、一日も早く平家を亡ぼさんとする大切なる場合に、今
我等不和を生せば平家に笑はれ申すべし。叔父十郎藏人殿貴殿を恨むる筋

北國下向

ありとて、此方へ参られたるを管なくも應ひかねて、是れまで一緒には居りま
すれど、義仲貴殿に對して毛頭異心は懐き申さぬ。」
と申し送ると、頼朝は、

「今こそ左様に申さるれど、この頼朝を討つべき謀叛の企ありと、確かに告げ知
らせたる者が御座る。」

と返答して土肥梶原を始め、數萬の兵を指向け攻撃に掛つた。義仲は眞實異
心のない事を證する爲めに、嫡子清水冠者義重とて、十一歳の子供に、海野望月
訪藤澤など一騎當千の兵を差副へて頼朝の陣へ遣はした。頼朝はこれを見て、
さては全く異心が無かつたのか、自分はまだ大きい子も有たぬゆゑ、好しく我
子に爲ようと、清水冠者を連れて鎌倉へ歸つた。

程なく義仲が東山北陸兩道を打隨へて、都へ亂入すると聞えたので、平家方で
は去年の冬から、明年は戰をするといふことを觸れておいたことであるから、山
陰山陽南海、西海の兵が雲霞のやうに馳せ集つた。東山道の近江、美濃、飛騨から
は來たが、遠江より東の兵と、北陸道の若狹より北の兵は一人も來なかつた。

平家では、頼朝を後廻しにして、先づ義仲を討たうといふことに決して、討手を
定めた。大將軍には小松三位中將維盛、越前三位道盛、副將軍には薩摩守忠度、皇
后宮亮經正、淡路守清房、參河守知孝、侍大將には越中次郎兵衛盛綱、上總大夫判官
忠綱、飛騨大夫判官景高、河内判官秀國、高橋判官長綱、武藏三郎左衛門有國を初め
として、然るべき侍三百四十餘人、都合其勢十萬餘人、四月十七日の朝都を立つて
北國へ向つたが、馬匹糧食の供給が不十分なので、相坂の關を出てからは、行く先
先で租税官物を横領し、民家を掠奪して進軍するものだから、道筋の人民は、徵發
を避くるため、何れも先を争うて山野に逃散した。

竹生島詣

大將軍維盛通盛は、すん／＼進んだけれども、副將軍忠度、經正、清房、知教などは、
未近江國鹽津、貝津邊に停つてゐた。中にも皇后宮亮經正は、詩歌管絃の道に長
じた人であつたので、軍旅の中にも優美の心を失はず、ある朝琵琶湖の渚に立つ
て、澳の小島を眺め、供の藤兵衛尉有教に向ひ、

「あれは何と申す島ぢや。」

「あれが名高い竹生島で御座りまする。」

「さらば參詣致さう。」

と經正は有教以下侍七人を召連れ、小舟に乗つて竹生島へ漕ぎ寄せた。

頃は四月の十八日、松に咲きかゝる藤の花も見えた。老を啼く鶯の聲も聞えた。岸に上つて島の景色を見るに、幽静閑雅にして、俗塵を絶ち、彼の秦の始皇や漢の武帝が或は童男童女を遣はし、或は方士術士を遣はして捜し求めさせた仙人の棲居といふ蓬萊洞も、之には及ぶまいと思はれた。ある經文に、「閻浮提の内に湖あり、其中に金輪際より生出でたる水精輪の山あり、天女栖む。」と云ふは此の竹生島の事ださうだと感嘆しつゝ、經正は明神の御前に進み、静かに祈念を凝してゐると、やがて日が暮れ、十八夜の月がさし昇つて、水上も照渡れば、社壇も輝いた。

住持は經正が其道の名手たることを知つてゐたので、琵琶を差出した。經正之を取つて上玄石上の秘曲を彈すれば、心も空も澄切つて、明神も感應まし〜

經正の袖の上に白龍の姿を現し玉ふ。餘りの忝さに琵琶をさし置き、

「千早振る

神に祈の

叶へばや

しるくも色の 顯はれにけり。」

斯く神明の納受ある上は、朝敵を平げんことも疑なしと悦び、勇んで竹生島から陣所へ歸つたのである。

燧合戦

木曾義仲は、自分は信濃に居つて、越前國に燧が城といふのを築いた。其の城には平泉寺長吏齋明威儀師、富樫入道佛誓、稻津新介、齋藤太林、六郎光明、石黒宮崎、上田建部、入善、佐美を初めとして六千餘人を立籠らせた。

燧が城は要害の地勢を占め、巖石廻り峙ち、後には山を負ひ、峰を連ね、前には能美川、新道川を控へ、二つの川の落合には大石を重ね上げ、大木を伐つて逆茂木に引き夥しく柵を搔上げたれば、東西の山の根には塞き留められた水が溝へて湖の如く、船なしには渡られなくなつてゐた。

平家の多勢は近寄ることが出来ず向の山に陣を取り相對して徒に日を送つてゐた。然るに城將の一人平泉寺長吏齋明豫て平家に心を寄せてゐたので竊に内應の密書を認め矢に挿んで平家の陣屋に射込んだ。平家の番兵が之を見つけて届け出でた大將軍の前で開いて見ると、

『此川は本よりの淵にあらず一時山川を塞き留めたるものなり若し夜中に足輕共を遣はして柵を切落させられれば水は程なく減すべし爰は馬の足場も好き所なり急ぎ渡りたまへ此方より内應して後矢を射るべし。かく申す者は平泉寺長吏齋明威儀師。』

攻めあぐんでゐた平家方は此の書を得て大に悦び夜に乗じて柵を切落させると果して水は落ちて了つた。之を見て平家方一度に颯と渡して犇々と押寄せた。城内の六千餘人は暫の間防ぎ戦つたが衆寡敵し難い所に齋明が裏切をしたので總崩れとなり富樫稻津林など皆加賀國へ退却して白山河内に陣を取つた。

勝に乗じた平家方は加賀國に攻め入り富樫林の二城を焼き拂ひ最早敵對す

る者もなくなつた急いで此の趣を都へ註進すると宗盛初め一門の人々大に勇み悦んだ。

五月八日平家方は猶も進んで加賀國篠原に著いて總軍を二手に分けた。大手の軍は小松三位中將維盛越前三位通盛を大將軍越中次郎兵衛盛績を侍大將として七萬餘人加賀越中の境なる礪竝山へ向ひ搦手の軍は薩摩守忠度皇后宮亮經正淡路守清房參河守知教を大將軍武藏三郎左衛門有國を侍大將として三萬餘人能登越中の境なる志保山へ向つた。

其時越後の國府にゐた木曾義仲は之を聞き五萬の兵を率ゐて平家の軍を逆へた。義仲が軍の吉例に従つて總軍を七手に分ち先づ叔父の十郎藏人行家が一萬餘人で志保山に向つた樋口次郎兼光落合五郎兼行を七千餘人で北里坂へ、仁科高梨山田次郎を七千餘人で南黒坂へ向はせ一萬餘人は伏兵として礪竝山の裾松長の柳原菜葉木林に隠して置き今井四郎兼平は六千餘人で鷺瀬を渡つて日宮林に陣を取つた義仲は自一萬餘人で小野部の渡を渡り礪竝山の北端の埴生といふ處に著いて陣を張つた。

木曾願書

木曾義仲は先づ謀を回らし、

「平家方は大軍の事なれば、此度は必死の戦をせねばならぬ。凡そ戦は多勢の敵に取り籠められては叶はないものである。先づ敵を欺くため、白旗三十旗を黒坂の上に打ち立てよ。平家方は之を見て、すは源氏の先陣だ、何十萬人寄せ来たか、取籠められては叶はじと進軍を止め、此山は四方岩石なるに依つて搦手より廻る氣遣ひなしと、礪竝山にて休息するに相違ない。其時我軍は暫く應ふ體に見せ掛け、夜に入つて平家の總軍を後の俱利迦羅が谷へ追ひ落して了ふのぢや。」

と先づ三十旗の白旗を黒坂の上に立てさせた案の如く平家方は是を見て、

「源氏の軍寄せたるぞ。彼の大軍に取籠められては叶ふまい、此處は馬の草飼水の便共に好き相ぢや。」

と礪竝山の山中猿の馬場といふ所で暫く人馬を休めた。義仲は埴生の陣より

り四方を見廻すと、夏山の緑の木の間に、赤の玉垣が隠見えて、前には鳥居が立つてゐた。案内者に向つて、

「彼は何處ぢや、社は何の神様ぢや。」

「八幡宮で御座ります。所の名も八幡と申します。」

義仲は大に喜び、書記に連れてゐる大夫房覺明を召し、

「八幡宮の御寶前近くに於て、今將に合戦を開かうとするとき、後代の爲め且つは祈禱の爲め、願書を奉らうと思ふが如何に。」

と云ふと、覺明は畏つて馬より下りた。覺明其の日の扮装は、褐の直垂に黒絲威の鎧着て、黒漆の太刀を佩き、二十四差した黒幌の矢を負ひ、塗籠藤の弓を脇に挟み、兜は脱いで背後に懸け、簾より用意の小硯墨紙を取出し、さて徐ろに願書を認めかゝつた。

この覺明は、儒家に生れ、藏人道廣と稱つて、勸學院に勤めてゐたのであるが、後出家して法名を最乗坊信救と命じ、常に南都へ往來してゐた。先年高倉宮が圍城寺へ入御の時、南都に遣はした牒狀の返事を、大衆は何と思つたか、信救に書か

せた、信救は其の文中に、「抑清盛入道は平氏の精練武家の塵芥。」と書いたので入道は之を聞いて大に怒り、「淨海程の者を平氏の精練武家の塵芥とは奇怪千萬急ぎ其の法師を搦捕つて死罪に行へ。」と命令した。其の爲め信救は南都を出て、北國へ逃げ下り、義仲の書記を勤め、太夫坊覺明と名乗つてゐるのであつた。

さて覺明は畢生の力を振つて戰勝祈願の妙文を書きあげた。義仲初め十三騎の上矢の鏑を抜いて願書に添へ、八幡宮の御寶殿に納めると雲の中より三羽の山鳩が飛んで来て、源氏の白旗の上に飛び翔つた。

昔神功皇后新羅御征伐の時、御方敗北に瀕したことがあつた其の時誠心を籠めて天に御祈誓あらせられると雲の中より靈鳩三羽飛び降り、御方の楯の面に顯はれて、臆て大勝利を得させられた。又此の義仲の先祖頼義朝臣奥州の阿部貞任宗任を征伐の時、賊軍の威強くして既に角よと見えたので頼義敵陣に向つて「此は私の火に非ず、神火なり。」と云つて火を放つと、風忽ちに敵城へ吹き覆うて、厨河の城は焼け落ち、貞任宗任は滅亡した。義仲は是等の先例を思出して、

馬より下り、兜を脱ぎ、手水嗽して、三羽の靈鳩を拜禮した。

俱利伽羅落

源平兩軍は、間三町許りに對陣して、孰も進まず、隙を狙ひ合つてゐた。良久つて源氏は、十五騎の精兵を選つて楯の外に進ませ、上矢の鏑を一度に平家の陣へ射込ませると、平家方も又十五騎の精兵に十五の鏑を射返させた。次に源氏三十騎を出せば、平家も三十騎、源氏五十騎を出せば、平家も五十騎、源氏百騎を出せば、平家も百騎を出して、互ひに矢を射合つた。矢戦をもどかしがりて、兩方の百騎は、共に陣頭に進み出で、既に勝負を決せんと早つたけれども、源氏より制して、態と勝負を爲せない、斯うして時を移し、夜に入るを待つて、後の俱利伽羅が谷へ追ひ落さうといふ源氏の謀を、平家は夢にも氣付かなかつた。

さうする内に、俱利伽羅堂の邊に廻つた搦手の源氏一萬餘人、箆を敲いて、盛に鬨の聲を擧げた。平家方は、各々背後を顧ると、白旗を雲の如くに差上げてゐる、搦手からは寄せられぬと安心してゐた所だから、之に氣を吞まれて、狼狽へ出す

と義仲の大手の一萬餘人も、茶葉木林の伏兵一萬餘人も、日宮林に控へた今井四郎の六千餘人も同じく咄と関を作つた。聲は木魂と相響いて凄しく山も谷も崩れるかと思はれた。

次第に闇くはなつて来るし、前後より敵を受けた平家方は「きたなし返せ〜」味方を勵まし踏止まらうとする勇士もあつたが、遂に總崩れとなつて、後の俱利伽羅谷へ我先にと降りて行つた。既に全く日は暮れて、先に降りた者の姿は見えないものだから、谷底に道があるのだと考へて、跡から〜と谷をさして落行いた。谷には拔路がなかつた馬には人、人には馬が落ち重なり〜さしも深い俱利伽羅谷も、七萬の平家勢で埋つて了つた。侍大將忠綱も、景高も、秀國も皆此谷の土となつたのである。

備中國の住人妹尾太郎兼康は、聞えた勇士であつたけれ共運盡きて加賀國の住人倉光次郎成澄が手に生捕られた。越前國越前が城で平家に返忠した平泉寺長吏齋明も亦囚はれて來たが、義仲は餘りに憎い坊主だ一番に斬り捨てよと、直に首を刎ねさせた。

平家の大將軍維盛、通盛は辛うじて加賀國へ退却した。七萬の兵が生き残つたのは僅か二千餘であつた。

同十二日に陸奥の秀衡より二頭の良馬を贈つてよこした。義仲は其を白山神社の神馬に獻じた。

義仲は斯く大勝を得たけれども、平家の搦手軍に向つた叔父十郎藏人行家の方の戦況が氣遣はしく、四萬の兵から二萬の精兵を選んで應援に出掛け、志保に向ひ氷見湊に行つた時、恰も満潮で深淺が分らない、鞍置馬を十匹許り追入れて見ると、鞍までは無かつたので、皆押渡つて上陸した。案の如く行家は敗軍して其處に引退き人馬を休めてゐるところであつた。行家の兵は義仲の新手の應援に力を得て、共に平家三萬餘騎の中へ駆入つた。兩軍烈しく戦つた末、大將軍參河守知教を初め、平家方は概ね討たれて、残りの者は追ひまくられて加賀國へ退却した。義仲は志保山を越え、能登の小田中新王の塚の前に進んで陣を取つた。

篠原合戦

義仲は新王の塚に滯陣中、多田八幡宮に蝶屋庄、菅生社に能美庄、氣比社に飯原庄、白山社に横江、宮丸の二庄、平泉寺に藤島七郷を寄進した。

去ぬる治承四年八月、石橋山の合戦に、兵衛佐頼朝に弓を引いた齋藤別當實盛、浮巢三郎重親、俵野五郎景久、伊藤九郎助氏、眞下四郎重直などは、皆京都へ逃上つて平家に屬してゐた。此等は戦に出るまで暫く休まうと、彼方此方に寄合つて酒など飲廻つてゐたが、ある日齋藤別當の陣に集まつた時、實盛が、

「平家は最早源氏に勝ちさうにも無い、お互に木曾殿へ屬かうではないか。」と發議した處が、皆其に同意した。翌日は浮巢三郎が許に寄合つたが、

「昨日申した事を眞實御同意あるか、如何。」と實盛が念を押すと、俵野五郎景久は、

「我等は東國にて多少人にも知られた者ではないか。昨日は平家、今日は源氏と、勢の吉い方に附廻るは武士の恥ぢや。餘人は知らず、この景久は平家方で討死の覺悟で御座る。」

と思ひ切つて斯う言ひ放つた。之を聞いて實盛はあざ笑ひながら、

「いかにも、各方の心を引かん爲め昨日は彼様申したのぢや。實盛も今度北國にて討死の覺悟、生きて再び都へは歸らぬと、宗盛卿にも申上げ、外の人にも其通り言つて置いたのぢや。」

其こそ侍らしい覺悟と皆之に同意し、共に死生を誓つた。此の座に居た二十餘人悉く此度北國の戦に約束通り討死して了つた。

平家の殘兵は加賀國篠原に退却して、人馬の休養をしてゐる。義仲は五萬餘の大軍を率ゐて同地へ向ひ、今井四郎兼平五百餘人を以て先陣に進んだ。平家方より、畠山庄司重能、小山田別當有重、宇都宮左衛門朝綱等三百餘人が之を迎へて、双方五騎十騎づゝ出合つて勝負をし、後には兩軍亂れ合ひ汗みごろになつて戦つたが、畠山今井の勢が打負けて引き退いた。